
Wild Angel

御雛子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wild Angel

【Nコード】

N9580X

【作者名】

御雛子

【あらすじ】

チビでバカでお調子者。だけど喧嘩無敵の主人公、早瀬友成は不良の癖に、不良の自覚は一切無し。そんな彼は、涼浪高校に進学した。しかし、中学時代に狂犬と呼ばれるほどの不良だった為、案の定様々な不良に狙われる羽目になる……。幼馴染や友人、悪友達と共に、喧嘩にバイト、勉強に恋愛？ 兎にも角にも大暴れ！！ 痛快！！ ド派手！！ 笑い（？）と涙（？）と青春の正統派不良小説、ここに始動！！

序幕（前書き）

以前掲載していたものを、リニューアルしました。
折角なんで、読んで見て下さい。

序幕

【不良】

1．よくないこと。

2．性質や品行の悪いこと。また、そのような青少年をさす。

小さい頃から悪ガキで、何時も先生に目を付けられていた。何時からそうなったのかは、本人の記憶には無い。

しかし、周りから言わせてしまえば、見事に立派で完全な不良少年になっていた。タバコも吸うし、酒もそこそこにたしなむ。加えて喧嘩も強い。その手の素質は十二分に有った。

ただし、本人に不良と言う自覚が、全く無い事に大きな問題があるのだが。

そして、彼は人より随分と体が小さかった。中学生と比べても、変わらない程度の背丈しかない。

しかし、頭二つ分は大きな相手でも、彼は全く怯むことはなかった。三発殴られたら、一発は殴り返す。相手が「参った」と言うまで、自分からは絶対に退かなかった。本人は「喧嘩は根性」と、笑いながら言っていた。

こう言ってしまうと、随分悪い印象になるだろう。だが、自分から闇雲に喧嘩を仕掛けたりするわけではない。

ただ、見た目の格好が如何にも不良少年。そういう理由で、他の不良達から喧嘩を売られやすい。しかも、見た目も小さいから、よけいに喧嘩を売られやすい。

そこで律儀に喧嘩を買っていくから、喧嘩の回数が増える。そこから、悪い噂が広まる。それを中学校の三年間で、何回も何十回も繰り返していた。

要するに、悪循環に陥った訳だ。

そういう理由で、本人が意図しない間に随分と彼の噂が広まってしまう、中学三年の時点で「東中の狂犬」と言う、大層な悪名が轟いていた。

その少年の名は「早瀬友成^{ハヤセトモナリ}」。昨日から、県立涼浪高校^{スズナミ}の一年生である。

壱話 友成参上!! (前書き)

余談ですが、某ラノベ新人賞に応募しましたが、案の定落選してました(笑)

電話 友成参上!!

県立涼浪高校。平均成績は中の下。一学年四クラスと、規模も至って普通。

男子は学ランで女子はセーラー服と、制服も普通。不良の数は、全校生徒の約三分の一程度。何処の街にでも有りそうな、やや不良よりの高校である。

不良校と言っても、絶対的な番長が居て、軍隊並みに上下関係が取れている訳でもなければ、地方の悪名高い不良がひしめき合うと言うような、漫画に描いた様な不良高校という訳でもない。

しいて言えば、ちよつと成績の下がる学生や、多少素行のよろしくない少年少女の通う普通科高校に当たるだろう。

時刻は朝八時過ぎ。友成は眠そう、尚且つダルそうな表情で、学校への道程を歩いている。

曲がり角で、出会い頭に女子学生ぶつかるとか、カツアゲされているいじめられっ子を助けるだとか……。生憎、下手な漫画に描かれているような、ベタな展開になる事もなく無事に学校へ到着した。(ちよつと、期待してただけだな……)

本人の正直な気持ちは、そんな感じであった。

しかし、世の中思い描く事が簡単に起こるほど、都合は良くない。教室への扉の前で、小さな溜め息を吐き出してから、教室へと足を踏み入れた。ちなみに、彼の教室は一年A組になる。

「おいーす」

友成は、眠そうな顔をしながら自席に座った。

「おはよ。友成」

友成に向けて、女子生徒が声をかけてきた。挨拶をしてきたのは、^{ナルミヤ}成海彩。黒のショートカットのヘアースタイルに、整った顔立ち。加えて、スタイルも悪くない。ただ、気の強い性格が災いしてか、

未だにフリーであり、付き合った経験も無い。

友成とは幼稚園からの幼馴染みで、小、中学校の九年間の内で六年は同じクラスだった。今年で三年連続、七年目だと言う。

「アンタにしては、珍しいね。遅刻の常習犯だったのにな」

彩が茶化すように、友成に言った。

「一応な。進学早々に遅刻するほど、常識の無い人間じゃねーよ」
そう反論しつつも、友成は欠伸を噛み殺していた。

「ふーん。でも、眠そうだね」

「ああ……、くそ眠いわ。明日から、起こしに来てくれよ」

「ヤダよ。幼馴染みだからって言っても、面倒だもん」

「ついでに、朝飯と洗濯も頼みたい」

「贅沢すぎ……。断固拒否するわ」

「……だよな。俺も頼まれたら、ぜってー断るっつの」

友成は惘然とした表情で、窓の外を見た。そんな他愛もない会話で時間を潰していると、ホームルーム前のチャイムが鳴りだしていた。

それと同時に教室の扉が、勢い良く開いた。

「……危ない危ない。遅刻すれすれだったな」

制服姿の男子が肩で息をしながら、教室に入ってきた。自席に着席すると、ふうと息を吐いた。

彼の名は、相原雄太^{アイハラユウタ}。友成、彩の中学からの友人である。アイドルグループに入れそうな程のイケメンで、成績優秀に運動神経も良い。天に二物も三物も、与えられてしまった人間と言える。周りにどんな人間かと言われれば、ひがみや妬みの言葉が飛び交う始末だ。付き合いたがる女性も多いが、こちらも事情により彼女は居ない。

「おう、雄太。えらくギリギリだったな」

「おはよ、雄太。随分、疲れた顔してない？」

友成と彩は、妙に疲れた顔をした雄太に言葉をかけた。

「オス、友成に彩ちゃん。しかし、珍しいな。友成が、遅刻してないなんて」

雄太は、ニヤニヤしながら言い返した。

「お前に言われる筋合いはねーよ。どーせ、雄太の事だ。新しいゲーム買って、徹夜して寝坊したんだろ？」

「それが、そのとおりでさ。最近出たギャルゲーが、とてつもなく面白くて。止め際が解らなくて、寝てないんだよ」

雄太は、自信満々にそう言った。女子生徒がキヤーキヤー言いそうな程の爽やかなスマイルだが、言ってる台詞は対極的に格好が付いていない。

雄太が彼女を作らない理由は、単に二次元にしか興味がない。分かりやすく言えば、超が付く程のオタクなのである。

「……お前、アホだな」

友成は、呆れ気味に突っ込んだ。

「まったく……。それで、私より成績が良いんだから。意味わかない……」

彩も友成と同様に、呆れた様子で溜め息を吐き出してそう言った。
「二人とも、二次元は最高だぞ」

満足そうな笑顔を見せて、親指を立てたグーサインを作りながら、雄太は嬉しそうにそう言った。

「俺には、その趣味はねえよ……」

「……右に同じく」

雄太の意見を、一秒足らずで否定する二人だった。

その日の授業は、滞りなく行われた。とは言うが、入学直後なので殆ど教師の自己紹介の等の雑談や、ホームルーム形式の授業が繰り返されただけである。これと言って、ノートや黒板を汚すような事柄は全く無かった。

そして放課後は、部活の勧誘や各生徒の雑談が校舎を賑やかにしていた。

「なあ、雄太。何か部活とか入るつもりあるか？」

鞆を背負いながら、友成が訪ねた。

「俺は、何処にも入る気無いな」

雄太は鞆に、勉強道具を片付けながら言った。

「そうなんだ。雄太くん、運動も出来るのに？」

彩も、二人の会話に横槍を入れた。

「ああ。部活入ると、遅くなるからさ。アニメが見えなくなるから、困るんだよな。それに、深夜のアニメも見たいしさ。部活やると、疲れて寝ちやいそうだし。それと、ゲームもやらなきゃいけないし……」

雄太は、身振り手振りを二人に見せながら、細かく解説を始めてしまった。様子を見る友成と彩は、ハアと溜め息を吐き出した。そこから、延々と続くであろう雄太の演説を中断させるべく、一言だけ告げた。

「そんな事するか!!」

ハモった突っ込みが、教室に響いた。

「重要だと思っただけだなあ……」

雄太はポツリと、寂しげに呟いた。

各生徒が雑談をしながら、帰りの支度をしていた時だった。

扉が乱暴に開くと、大柄な金髪の不良生徒を先頭に、何人かの不良達がズカズカと乱入してきた。教室に残っていた生徒達の視線全てが、不良生徒達に注がれる。

教卓を、バンと叩きつけて、開口一番に不良が息を巻く。

「おう、早瀬友成って奴はどいつだ!!」

教室中に聞こえる大声で、金髪の不良が友成の名を呼びつけた。

その瞬間、クラス全ての視線が友成の方へと向いた。

「俺がそうだけど。テメエこそ、誰だよ？」

友成は自分を指差しながら、大柄な生徒を睨み付ける。

「おめえが早瀬……。随分ちいせえな」

座っている状態を差し引いても、友成の体は小さい。そして、金髪の不良の体格は、かなり大柄で筋肉質である。

「……チビっていうな。オメエがデカすぎるんだっての」

友成は、身長のことを言われて、表情をムツと強張らせる。

「俺は1 B。元西中の手塚春樹テツカハルキってモンだ」

春樹と名乗った男は、自信満々といった表情でニヤリと笑う。

「……んで、俺に何の用だよ」

友成は仏頂面を保った状態で、素っ気なく答えた。あまり乗り気で無い事は、容易に窺える。

「俺は涼浪の一年を仕切るつもりだ。早い話が、一年の喧嘩ナンバーワン決定戦って訳で、俺とタイマン張れよ」

春樹は、友成へ向けてビシッと指差した。その表情は不敵に笑みを浮かべ、如何にも自信が満ち溢れていた。

「メンドーだからヤダ」

友成は、ふて腐れた様にそう答えた。

「はあ！？ テメエ、それが“東中の狂犬”って呼ばれた奴の言うことか！！」

「知るか、そんなもん。仕切りたきや、テメエが勝手にやれよ。雄太、彩、さつさと帰ろうぜ」

友成は鞆を担ぎ、春樹の横を抜けて廊下に出ていった。

「……ちい。なめやがって、あのチビ！！」

あしらわれたような態度に、納得いかない春樹。廊下に飛び出て、友成の後ろ姿を睨む。そして、走って追い付くと、友成を目掛けてパンチを繰り出した。

（死ねや、チビ！！）

長身からの打ち下ろし右フック、しかも後ろから。友成には、完全に死角だったのだが。

——ブンッ！！

勢いの良い風切り音を残し、拳の先には何もなかった。

（……なっ、避けやがった！？）

拳の到達よりも素早く、身を屈めて避けた友成。その勢いで、器械体操並みのハンドスプリングで春樹との間合いを取った。

「危ねえな……。人を後ろから殴っちゃいけませんって、習わなか

ったか？」

振り向き様に春樹を睨み付けながら、友成がドスの聞かせた声を出す。

「けっ……。次は、顔面に打ち込んでやるよ!!」

春樹も、友成を睨み付けて啖呵を切った。

「後で体育館裏に来やがれ」

春樹は、吐き捨てる様にそう告げて廊下から立ち去った。それと同時に、教室を出た雄太と彩は、友成に追い付いた。

「お、おい。大丈夫なのか？」

雄太が聞くと、友成は無言のまま頷いた。

「友成……。また、喧嘩するの？」

彩は、心配そうに友成を見つめた。

「しねーよ。あのデクが、勝手にやりたがってるだけだ。ほっとけ」

友成は、部外者が見ても解る位、不機嫌にそう言った。

「……そう。よかったー」

彩は安堵の息を漏らした。

「そうか……。でも、あの手塚春樹って奴は“西中の大魔神”って呼ばれてた不良だぞ。厄介な奴に、目を付けられたな……」

雄太は、まだ神妙な面持ちだった。内心、ほって置いて引き下がる相手とは思えなかったからだ。

「……関係ねーよ、そんな事。さて、帰るぞ」

「あ、待ちなよ。友成」

ツカツカと歩き出した友成を、彩は小走りで追いかける。

「雄太、行こうぜ」

友成は、振り向きながら雄太を見た。しかし、雄太は急にハッとした表情を見せていた。

「ん……。ああ……。携帯忘れた。取りに戻るから、先に帰っててくれよ。すぐに、追い付くからさ」

「ふーん。なら、先に帰ってるぜ」

雄太は教室に戻るための口実で、友成、彩と別れた。

「さてと……」

雄太の携帯電話は、制服のポケットに入っていた。そして、何かを決めた様子で雄太は体育館裏に向かって歩き出した。

体育館裏に着くと、乱入してきた不良生徒達が立っていた。その中心にいる春樹は、腕組みをしながら、たどり着いた雄太を睨み付ける。

「……西中の大魔神、手塚春樹だな」

ズバリと名前を言われた春樹は、ニヤリと不敵な笑みを見せた。

「テメエ、さつき早瀬と居た野郎だな？」

徐に胸ポケットからタバコの箱を取り出した。クシャリと歪んだソフトボックスから、慣れた手付きで一本のタバコを取り出した。

「俺は相原雄太。早瀬友成なら、帰ったよ」

そう聞くと、春樹はタバコを一本口にくわえて、安物のライターで火を点けた。肺に含んだ煙を吐き出すと同時に、雄太が言葉を続ける。

「アイツは、誰が一番とか興味無い奴だからさ」

じゃあなと告げて、雄太は帰ろうとする。だが、そうは問屋が卸さなかった。

「おう、待てよー!!」

春樹は怒声を出して、雄太の足を止めさせた。雄太はクルリと、春樹の方へと振り返る。

（……やっぱり、こうなっちゃう訳ね）

雄太は観念したかのように、苦笑いを浮かべる。

「テメエ、早瀬とはダチなんだろ？」

春樹は雄太を睨み付け、少しだけ口元をニヤリとさせた。そのまま制服を脱ぎ捨てると、筋肉の鎧を纏った豪腕が、日光に照らされる。

「……だったら？」

「ダチのイケメンが、ボコボコになっても……アイツは黙ってる野郎か？」

春樹は不適に笑い、くわえたタバコを、ペツと吐き捨てた。タバコの火を、つま先でグリグリと踏み消した。

「アンタ……俺のこと、舐めすぎじゃない？」

雄太は少し不機嫌そうな表情を浮かべて、鞆を地面に投げ捨てた。

学校からさつさと帰宅した友成は、集合団地の一室にある自宅にて、一人で寝るところがっている。今現在、暇を持て余している状態だ。

「……腹減ったな」

友成の口から何気なく言葉が零れてしまうと、同じタイミングで玄関のインターホンの機械的なチャイムが部屋に響いた。

「誰だよ、こんな時間に……」

面倒くさそうに、よっこらせと聞こえてくるような雰囲気では体を起こして、ドアに向かう。

「よ、元気にしてる？」

ドアを開くと、玄関前に立っていたのは彩だった。

「誰かと思ったら、彩かよ……」

「あつそう。そう言う事言うんだ……」

彩は、不満そうに呟くと、手に持っていたビニール袋に入っているタッパーを、友成に向けて見せびらかした。

「すいません、どうぞお入りください」

中身を察したのか、友成は態度をコロツと変えて、下手に出る。

それを見た彩はニコツと笑って、友成の自宅に上り込んだ。

「お邪魔します」

彩は早速、持ってきたタッパーをテーブルの上に広げた。

「お、美味そうじゃん」

タッパーの中身を見た、友成の目がキラキラと輝きます。中身は、肉ジャガとキンピラごぼうと言う、実に家庭的なおかずであった。

「あんた、コレ好きでしょ？ お母さんが作り過ぎてて、折角だから持っててやれって言われてさ」

彩がそう言っている側から、友成は既に棚から箸と茶碗を出していた。

「理由は何でも良いっての。ありがてえよ」

友成は、そう言ってから、更にレトルトの白いご飯を、レンジに入れて温め始めていた。余程早く食べたいのか、餌を目の前にした空腹のペットの様に慌ただしく動いている。

「そんなに慌てなくても、誰も盗らないわよ……。私も食べてきてるし」

彩は、忙しく食事の準備をする友成を眺めながら、ヤレヤレと言いたそうに、大きなため息を吐いた。

「だってよ、好きな食い物が目の前に出されたら、我慢できねえじゃん。さて、いただきます!!!」

お膳の前で、一回両手を合わせると、友成は目の前の食べ物を一気にがつつき始めた。

その食事の様子は、早食い選手権の選手かと思える程に、一気にご飯を口に入れて、窒息してしまうのでは無いかと思える位、早いタイミングで飲み込んでいく。

餌を丸のみする蛇の方が、よっぽど丁寧に食べる。彩はそんな事を内心で思いつつ、友成に喋りかける。

「……そう言えば、おばさんは今日も仕事なの？」

彩に視線をチラリと視線を移した友成は、モゴモゴと口を動かすが、声は出せていない。一気に口の中の物を飲み込み、更にお茶で食道から胃袋へと流し込んだ。

「……ふはあ。お袋は仕事だよ。まあ、長距離のトラック運転手だからよ。週に一回帰って来るかどうかだしな」

そう呟いて、友成は再び目の前の食事を、口の中の体積の限界まで詰め込んだ。

「ねえ、友成」

「……？」

口が塞がっている友成は、目だけで彩に返事を返した。

「あんたが良かったら、私の家に食べにきなよ。どうせ、家族ぐるみの付き合いなんだし。」

それに、あんたって一人暮らし出来そうに無いもん」

友成は、再び丸のみに近い形で飲み込んでから、口を開く。

「気持ちには、ありがてえけどな。そこまでしてもらっちゃ、悪いしよ。俺でも、一応遠慮つてものはするぜ?」

そう言った友成の表情は、ニツと笑っていた。

「ふふ。あんたって、やっぱり変わってるね」

彩も、そう返事をして微笑んでいる。

「……そうか?」

友成は、首を斜めに傾けながら、彩を見つめる。

「……ま、へそ曲がりなのは昔から知ってるけどね」

少しだけ呆れた様に、彩はそう言った。しかし、顔はどこか嬉しそうだった。

「……?」

友成は疑問に思いつつ、嬉しそうな彩の表情を眺めながら、一通りのおかず全てを平らげた。

「……ふいー、食った食った。ごちそうさん」

お茶を一気に飲み干して、胃袋の中が満タンになった事を、満足したようにそう言った。

「お粗末様。しかし、あんたって食べるの早いね」

「そうか? 普通だと思ってるぜ」

ちなみに、友成が食事を開始して、正味十分程度しかかかっていない。

「さて、私もそろそろ、帰るね」

彩がそう言つて、持ち込んだタッパをビニール袋に片づけた。

「おう。また明日な」

友成はそう言つて、早速タバコを一本口にくわえていた。ライターでジュボツと火を点けると、何の躊躇もなく不健康な煙を美味そうに吸い込んだ。

「アンタさ……未成年なんだから、そんなに堂々と吸うな!!」

彩が、友成の呆れた行動に早速ツツコミを入れた。

「だってよ……飯食った後の一服って、うめえんだぜ？」

友成はお構いなしで、笑顔を見せながらタバコを手に持ち替えた。

「まったく……。バカ」

彩は不機嫌な声で呟いて、ドアを乱暴に閉めて退室してしまった。

「……そんな、不機嫌にならなくてもよ」

一人残された友成は、煙の混ざったため息を大きく吐き出していた。

翌日。

「ふぁー、眠てえ……」

「眠いって、もう五回は繰り返してるわよ……」

欠伸で涙目の友成と、ヤレヤレと言いたげな彩が、通学路を歩いていた。

「そう言えば、雄太くん。昨日は、結局こなかったね」

「どうせ、机探しても携帯見つかんねえで……。結局、鞆の底に入ってたつうオチじゃねえのか？」

彩はウーンと首を少し傾けたが、友成は特に気に留めていなかった。あれこれ話をしていると、後ろから聞き慣れた声が聞こえた。

「……おす、お二人さん」

二人は振り替えるなり、かける言葉が見つからない状態だった。

「雄太くん、その顔……」

そこに立って居たのは、顔中に絆創膏やガーゼを張り付けて、アザだらけの雄太だった。

「雄太、お前……昨日の連中にやられたのか!？」

友成の問いに、雄太は悔しそうな苦笑いを見せた。

「……いや。手塚とタイムンさ。……アイツ、かなり強いわ」

雄太から聞くと、友成の表情は見る見るうちに怒りの色に染まっていく。今にも走り出して、学校に向かい突っ走りそうな勢いだ

った。

「待ちなよ、友成!!」

彩は強気な言葉で、友成を制止させた。

「あんたさ、昨日の不良と喧嘩するつもりだよね？」

「だったら？」

友成は鋭くなった眼で、彩の瞳を見つめた。

「止めるわよ。例え相手が暴力を振るってきても……暴力なんかじゃ、何も解決しないじゃない!!」

彩は、怒ったように言った。

「……彩。俺は、喧嘩しに行くんじゃないよ」

友成は一呼吸置いて、再び口を開いた。

「……ツレの敵討ち。だから、俺は悪くねーっての」

人差し指を立てて、その言葉を出したのであった。そして、友成は学校へ向かって駆け出した。

「ちょ……、友成い!!」

彩は名前を叫ぶが、友成の後ろ姿はあつという間に小さくなっていった。

「……ただの屁理屈じゃない、あのバカ」

不機嫌と呆れの混ざった表情の彩は、大きな溜め息を吐き出した。

「俺はあの方が、アイツらしいと思うけどな」

それと対照的に、雄太のズタボコの顔は少しだけ笑っていた。

一時限目開始のチャイムは、既に鳴っていた。しかし、体育館裏には、春樹と同じクラスの取り巻きが何人か居た。春樹は頬に張られた絆創膏を、人差し指で撫でながら、くわえたタバコの煙を吸った。

「手塚くん。アイツ、来るのか？」

取り巻きの一人に聞かれると、春樹はタバコの煙を吐き出しながらニヤリと笑った。

「ダチがあんだだけ、ボコられたんだ。来るに決まってるぜ。まあ、

あのイケメンも空手やってたらしいから、少しは強えみてえだが、俺には通用しねえよ」

「そりゃ、そうだよな」

ガヤガヤと、待ちわびる様に不良達は会話をしていた。

「あ、俺飲み物かつてくるわ」

一人が、場を離れた。

その十秒後だった。

——バキッ!!

聞こえるくらいの、乾いた打撃音が響いた。音の発生場所に目を向けると、地面に転がる不良と仁王立ちしている友成の姿があった。
(……コイツ、一撃で沈めやがった)

小柄な友成の体からは想像出来ない、強力なパンチに、春樹は驚きと嬉しさの混じり合った、奇妙な感情が沸き上がってきた。

「やつと来やがったな」

春樹は立ち上がり、肩を回しながら友成に歩み寄る。

「おー。雄太が随分世話になったなあ……」

友成は、指をゴキゴキと鳴らす。その表情は、誰の目から見ても怒っている事がよく解る。

「救急車の手配はしてきたか？ チビ助!!」

「デメエを乗せるようにな、デク野郎!!」

長身から、友成を見下す形の春樹は不敵な微笑を浮かべている。

また友成も、見上げる様にして、春樹を睨み付ける。

その表情、その目付きは、狩りをする為に獲物を見る肉食獣の様に鋭く、お互いの間合いを取り合う様に、間隔を縮めていく。

「……ブツ殺す!!」

春樹がそう言葉を吐くと、両者が同時に地面を蹴った。間合いが一気に縮まり、射程距離に入った瞬間。

先手を撃った、春樹が拳を振りかざす。

「オラァ!!」

——ブンッ!!

春樹が大振りの右フックを繰り出すが、友成は難なく避けて懷に踏み込んだ。

「シヤラア……！」

——ガツンッ……！」

友成の右拳が、春樹の顔面を捕らえ鈍い音が響く。

「もう一丁……！」

——バキヤアッ……！」

今度は右の肘で、春樹のアゴを力チ上げた。春樹の顔が持ち上がった。

「……フンガア……！」

——ベキヤア……！」

しかし、春樹も負けじと左拳を打ち下ろした。友成の顔面にパンチがヒットすると、友成は大きく体制を崩す。

——ズドオッ……！」

更に右のボディブローを食らうと、小柄な体は浮き上がって、メートル近く後退してしまった。友成は、一旦バックステップして間合いを広げ、距離をとった。

（……くそつたれ。なんつーバカ力だよ、このデクは……）

（今のボディで倒れねえつつうのは、どういうわけだ？ このチビ、結構やるじゃねえか……。）

お互いにらみ合い、再び間合いをギリギリと詰めていく。

そして、再び拳を振るって殴りあう。

「ウラア……！」

——バキヤアッ……！」

春樹の左フックが、友成の顔面にヒット。

「セイヤア……！」

——ドゴオッ……！」

負けじと、友成もミドルキックをぶち込んだ。豪快な打撃音を響かせて、何発も殴り合い、蹴り合い、お互いの力は均衡していた。

「……ハア……ハア」

「……ゼエ……ゼエ」

数分間の攻防。格闘技のような駆け引きやテクニクは、一切ない。己の持てる力を振り絞った全力の殴り合いは、見ていた不良達の視線を釘付けにさせていた。

しかし、真正面からの殴り合いの末、二人ともダメージは限界に近かった。

（……クソ。もう、足に来てやがる。大したパワーじゃねえか、このデク野郎）

（チキシヨ……流石にキツイぜ。相当タフだ、このチビ助……）

相手を沈めるには、渾身の一撃を繰り出すしか、手は無い。お互い、あと一撃で決まるのは解っていた。

「うおおお!!」

「しゃあつ!!」

両者の雄叫びが同時に上がると、再び間合いが狭まる。

春樹が、一瞬早く右フックを繰り出した。

——ヒュン——

渾身の力で、拳を振りぬいた瞬間、春樹は自身の目を疑った。

（……消えた!?）

空振りした拳。目の前に居た友成の姿が、一瞬の間に消えていた。そして、ハッと気付いて、視線を下に向けると、しゃがんだ状態の友成が居た。

（しまっ……）

春樹がそう思った瞬間には、既に遅かった。

——ゴシャアアッ——

しゃがんだ状態からカエル飛びの要領で、ミサイルの用に頭突きを繰り出した。

友成の頭突きは、完全にカウンターの状態でアゴを撃ち抜いていた。鈍い音が顔面から響くと同時に、春樹の大きな体は、ズシンと後ろに倒れ込んだ。

「……いつてえ」

沈んだ春樹は、青空を見ながらポツリと言葉が出てしまった。

（まさか、こんなチビに見下ろされるとはな…）

倒れた春樹は、友成を見上げるしかなかった。すると、友成が春樹を見下ろしながら、口元の血を拭ってニヤツと笑った。

「雄太の借りは返したぜ…… “春樹”。あとよ、あちこち痛てえから帰って寝る」

そう言い残して、友成はその場を立ち去った。立ち去る小さな背中では、春樹にとっては、この上なく大きく感じていた。視線を空に戻すと、大の字になったまま自分自身が笑って居る事に気が付いた。（……久しぶりに負けちゃったな。でも……全力のタイマンで負けちゃったんだ。悔いはねえ……かな？）

少しだけ物思いに吹けて、空を見上げていた。すると、取り巻きの不良が視界に入ってきた。

「……手塚くん、大丈夫かよ？」

取り巻きの一人が、心配そうに春樹に聞いた。

「……見たまんまだぜ」

春樹はムクリと、上体を起こした。胸ポケットから取り出したタバコの箱は、クシャクシャになっていた。

グニヤリと曲がったタバコを、一本取り出して口にくわえる。

「……クソ。次は、負けねーよ」

そう呟いて、曲がったタバコに火を点けたのだった。

友成は体育館裏を離れ、昇降口に向かった。下駄箱に着くと、ロボロボの顔をニヤリとさせた雄太が居た。そして、壁にもたれながら友成を見る。

「友成もロボロボだな」

「……バーカ。楽勝だったよ」

友成は、アザだらけのすまし顔を見せて答えた。

「……ふーん」

雄太は、何かを言いたそうな、ニヤニヤとした顔をする。

「……んだよ。俺はアチコチ痛えから、帰って寝るんだよ」

「楽勝じゃないだろ、それじゃ……」

雄太がそう突っ込むと、友成は顔をムツとさせた。

「……うるせーよ。じゃあ、また明日な」

そう言っただけで靴を履きかえて、学校を出ようとした。しかし、靴を出した所で誰かに肩をガシツと捕まれた。

振り向けば、そこに居たのは彩だった。

「……ゲツ、彩」

彩は、明らかに不機嫌そうな顔をしている。

「……保健室行ってから、教室に戻るよ」

「マジかよ……。痛えから、帰ってえんだよ……」

「うるさい、自業自得だよ!!」

彩は強引に、友成の腕を掴むと、ズルズルと引つ張りながら、保健室に向かっていった。

(……俺も、教室に戻るかな)

二人を見届けた雄太も、自分の教室に足を向けたのであった。

翌日の昼休み。

昼食時の込み合う学食に、友成と雄太は来ていた。友成は先に席に座って、食事を始めていた。

「……友成、素うどん一杯だけなのか？」

雄太は、カレーライスとサラダが乗っているお膳を、テーブルに置きながらそう聞いてしまった。

「……悪いかよ？」

絆創膏だらけの、ボロボロの顔をした友成は憮然と答えた。

「金無えし。……アゴが痛えから、噛みたくねえんだよ」

そう言っただけで、うどんを一口すすった。雄太はついつい観察してみると、確かに噛まずに飲み込んでいる状態だった。

「そういう事ね」

雄太も、カレーをスプーンで一口含んだ。二人が昼食を食べてい

ると、二つ隣の座席にスタボロの顔した春樹が座った。

「……よお、ひっでえツラだな」

友成ニヤニヤしては、春樹を茶化すように言葉をかけた。

「……テメエも、同じだろうよ」

春樹はきつちり言い返してから、カツ丼を一口頬張った。そこから、暫く無言で食事が続いた。

「……オイ、お前ら」

春樹が、不意に口を開いた。

「……んだよ？」

「何だ？」

友成と雄太が、同時に返事をした。

すると、春樹が制服のポケットから、グシャグシャになったラーメン屋のチラシを差し出した。

「何だコレ？」

チラシを手にとった、友成は聞いた。

「俺ん家、ラーメン屋なんだよ。今度食いに来たら、サービスしてくぜ」

そう言つて、春樹は残りのカツ丼を、さつさと掻き込んだ。そして、じゃあなと言つて食堂を後にした。

「……ラーメンねえ」

「まあ、気が向いたら行ってみようぜ」

そう呟きながら、チラシをマジマジと眺める。文字ばかりの、如何にも手作りと言えるチラシを見つつ、二人は残りの食事を掻き込むのであった。
？

壱話 友成参上！！（後書き）

登場人物等、細かい設定は追々載せていく予定です。

弐話 涼浪の先輩方（前書き）

週一の更新を、心がけていきたいですが……難しいかなあ。

多分、この先は金曜辺りに更新していくと思います。

式話 涼浪の先輩方

入学から約二週間が経過した。桜の花びらは、すっかりに散ってしまっていた。

本日も、ポカポカ陽気。春の気候は、程よく睡眠を誘ってくる。もっとも、友成自身は季節は関係無しに、授業中は爆睡するのだから。

友成自身、春樹とのタイマン以降は、特に問題は起きていなかった。ただし、問題行動に関しては、多々合ったりはするのだが。

「ふうー……」

すっかり、絆創膏の取れた顔の友成。生徒指導の教諭が目撃しようものなら、全速力で走ってくるに違いない。だが、それに構う事無く、美味そうにタバコの煙を吐き出した。

「……やっぱ、食後の一服はうめえな」

春樹も喫煙暦の長いお父さんも顔負けしてしまう位、慣れた手付きでタバコを吸っていた。二人とも当然未成年だが、その行為に躊躇いのかけらは見当たらない。

「友成、ところでよ……」

「何だよ。春樹からどの部活入る……なんて、まず無えよな？」

タイマン以降、二人はすっかり名前で呼ぶような仲になっていた。友人と言うべきか、悪友と言うべきか。

「そりゃそうだ。俺とお前で、コンビ組まねえか？お前となら、無敵コンビになるぜ？」

「メンドーだから、やだ」

春樹の誘いに、友成はあっさり断った。

「お前さ……。そんだけ喧嘩強いんだぜ？ もっとよ、こう……ガンガン行く気は無いのかよー！」

「ねーよ。お前とタイマン張ったのも、そもそもお前から喧嘩売ってきたからだろぅが……」

友成はヤレヤレと溜め息を吐くが、春樹は拳をグイッと突き出して、更に言葉を続けた。

「男ならよ、拳一つで成り上がるって成し遂げてえじゃねえか!!」
春樹は、自信満々の顔を見せた。

「……お前さ、Vシネマとか漫画とかの見すぎだわ」

友成は呆れ気味に、二度目の溜め息を吐き出した。

その後、教室に戻り五時間目の授業が始まった。友成の場合、五時間目と六時間目は教諭の言葉を子守唄に案の定睡眠学習になっていた。そして、放課後になった所でようやく目を覚ました。

「……ふぁーあ。良く寝たわー」

友成は、グイと背を伸ばした。

「アンタは、何しに学校来てるのよ……」

彩は、呆れながら突っ込みを入れた。

「そりゃ、勉強だろ。所謂、睡眠学習って奴？」

「学習になってないわよ。ノートだったら貸さないからね!!」

「固え事言っなよー。俺とお前の仲だろー」

「アンタな、そう言う勘違いを生むような事を言っな!!」

ケラケラと笑う友成。彩は右の手のひらで、頭をパシーンとひっぱたいた。乾いた小気味良い音が、教室に響いた。

「……!!」

何故か、叩いた彩の方が、手を押さえてうずくまった。

「アンタが石頭って忘れてたわ……」

「グーだったら、骨折してたかもな」

友成は、得意気に胸を張った。彩はよほど手が痛いのか、手首から先をブルブルを振っている。

「……そういえばさ、雄太君の姿が見あたらないね？」

彩は、教室をグルリと見渡した。

「そーいや、いねえな。あ、待てよ……」

友成は、何かを思いだしたように、あごを親指で撫でた。

「雄太君、何か用事でもあったのかな？」

「確か、DVDの発売日とか言ってた気がする……」

「ふーん……。なんとなく、どういうDVDか予想は付くけど……」
友成と彩の頭に、可愛らしい服装をした、女の子のイラストが思い浮かんでいた。

「まあ、イイか……。さーて、俺も帰るぜ。じゃな!!」

「うん、ちゃんと帰りなよ」

友成は彩に手を振ると、鞆を引手繰って教室を後にした。

廊下に出た友成。その様子を、物陰から確認している人影があった。当然、本人は気がついていない。

「あれが、一年の早瀬友成か。噂ほど、強くはなさそうだが……」

「確かにな。だが、あれでカス学のヤンキー五人潰した事あるみたいだからな。何にしても、注意しとくべきだ」

「川澄くんは、こっちに引き込むつもりでいるみたいだぜ？」

「そりゃ、無理だろ……。ウチの頭の後輩だしよ……」

「それより、手塚春樹って奴だろ。相当強いつて話だからな。あの早瀬って奴には負けてるけど、戦力は多い方が良いつてたしよ……」

見ていたのは、恐らく涼浪の上級生なのだろう。友成を包囲する準備が整っている事は、狙われている張本人は、知るわけが無かった。

帰宅の途中、友成はコンビニでアルバイト情報誌を、立ち読みしていた。

（……やっぱ、コンビニかな。スタンドがいいけど、高校生は無理みたいだし）

雑誌を棚に戻し、友成はコピーと履歴書を手に取った。レジに行こうとしたとき、不意に声をかけられた。

「よう、友成。履歴書なんか買って、バイトでもするの？」

「あ、太陽先輩じゃないっすか!？」

声の主は友成の先輩、水島太陽だった。
ミスシマタイヨウ

友成の地元の先輩であり、唯一頭の上がない存在。言わば、友成の喧嘩の師匠と言えるだろう。空手の有段者であり、喧嘩も相当強いとの事だ。ちなみに、涼浪高校の三年でもある。

「ちよつと、話でもしようぜ。コーヒー奢ってやるよ」

太陽はそう言って、友成の握っていた缶コーヒーを手に取った。

「先輩、ゴチになります!!」

友成は、深々と頭を下げた。

「……お前、コンビニの中だからさ。そんなに、でかい声出すなよ……」

「あ……」

店員とお客の視線全てが、友成と太陽に向いていた。

二人はコンビニを出て、真向かい有る公園に行った。公園のベンチに座ると、友成は早速奢りのコーヒーを一口飲んだ。

「んー……奢りのコーヒーは、やっぱり美味しい!!」

そう言って、友成は胸ポケットからタバコを取り出した。

「ま、先輩の甲斐性って奴。バイトの給料入ったばかりだしな」

太陽も、そう言ってコーヒーを一口飲んだ。

「そついや、お前バイト探してんのか?」

「そつすね……。家、ビンボーだから。せめて、遊ぶ金位は自分で確保しとかないと。メンドーだけど……」

「ま、俺もバイトしてるのも似たような理由だしな。友成が良ければ、バイト先の紹介するぜ?」

「まじっすか!?!」

「ああ。店長が人手が欲しいって、言ってたしな。それに、知り合い居た方が働きやすいだろ?」

「そりゃ、ありがたいっすよ。……所で、一個聞いてイイっすか?」

友成は、少し言いづらそうに太陽に尋ねた。

「何だよ。自給に関しては、知らないぞ」

「自給じゃなくて……先輩のバイト先って、何の仕事っすか?」

聞かれた太陽は、少し照れくさそうに口を開いた。

「……駅前の弁当屋で、惣菜作ってる」

「似合わねー……」

友成は苦笑いしながら、リアクションしてしまった。頭の上がない先輩が、エプロンを着けて厨房で料理する姿は、友成には想像出来なかった。

「……解ってるよ。ほっとけ」

太陽は、少しふて腐れた様に返答したのだった。

少しだけ、会話が途切れると、友成は改まって口を開いた。先程より幾分固い感じの声で、太陽に喋りかける。

「そっぴゃ、話変わるんすけど……。いいっすか？」

「何だよ、改まって」

友成の緩んでいた表情が、少し引きだけ締まった。

「先輩の親父さん……体、大丈夫なんすか？」

「そうだな……」

太陽は、一呼吸置いてから口を開いた。

「姉貴は働いてるし。後は俺のバイト代と、お袋のパート代。全部含めれば、生活は出来るからな。後輩に心配させるほど、落ちぶれちやいないぜ」

そう言つと、太陽は笑顔を見せた。もともと、それは力の無い笑顔だったと、友成はすぐに解っていた。

「先輩……。俺がバイト受かって、給料入ったら何か食いに行くっすよー！」

友成はそう言つて、親指を突きたてた手を出した。

「おう、そうだな。それじゃ、バイト先に話はしとくな」

「なら、頼みまっす」

そう言つと、二人は公園のベンチを後にした。

同日、午後七時過ぎ。

春樹は、商店街を歩いていた。目的も無く、ブラブラしながら帰

宅といった所だろう。半数の店はシャッターが閉まり、薄暗くなつた街の路地を、古びたオレンジの街灯が照らしている。多少寂れた駅前通りとはいえ、時刻相応の人通りはあった。

「……なんだ？」

数名の学生が、春樹の前を塞ぐ様に立っていた。春樹は、涼浪高校の制服だとすぐに理解した。

「お前が、手塚春樹だな？」

一人の男が、春樹に尋ねてきた。

「そうだ。あんたら、涼浪の先輩か？」

春樹の眉間にシワが寄り、不機嫌のオーラがにじみ出る。

「ま、そう怒るなよ。怖えからさ」

男は、ニヤニヤ笑いながらそう言った。そのヘラヘラした口調が、春樹の神経を余計に逆撫でしたようだった。

「あんだと？ あんた等、どうせ俺が生意気だから数集めて、フク口にしにきたんだろ？」

「……じゃあ、もしそうだったら？」

「人数なんか、関係無えよ……。全員、この場でぶっ潰す！！」

「おーおー。随分、バイオレンスな奴だな」

春樹の威嚇するような雰囲気とは対照的に、その男はニヤニヤと薄ら笑いをしたままだ。

「おう、どこからでもかかってこいや！！」

春樹は、フラインピングポーズを構えたが、男たちは対照的に向かってくる様子は無かった。

「そう気張るなよ。俺たちは、喧嘩しに来たわけじゃねえよ」

男は、そう口を開いた。

「……だったら、なんのつもりだ？」

「言っつてみりゃ、スカウトだ」

「スカウトだあ？」

「九時位に“パルス”ってダーツバーに来い。お前を歓迎するぜ」
男はそう告げると、ニヤリと笑った。

「じゃあな、待つてるぜ」

そして、春樹の前から去っていった。

「……何なんだ？」

一人残された春樹は、そう呟いてしまった。とにかく、時間を潰してから、パルスと言うダーツバーに向かうことにした。

時計の時刻は、九時を少し過ぎていた。パルスと言うダーツバーは、商店街の裏路地に佇む古い雑居ビルの一階にあった。扉にはスプレーの落書きがあり、窓ガラスはヤニで汚れきっていた。

「ここか。随分きたねえ店だな……」

春樹の第一印象は、決して良い物では無かった。蹴り壊せそうな木製のドアを開き、ダーツバーに入店する。

店内では、テーブル席を中心に、十数人の不良がたむろっている。

「……川澄君、来たぜ」

たむろっている不良の一人が川澄と言う人物を呼ぶと、奥でソファーに腰をかけていた、金髪でオールバックの男が立ち上がった。

「よく来たな、手塚春樹。歓迎するぜ」

「あんたは？」

春樹は、まだ警戒心を解いていないようだった。

「涼浪の三年、川澄慶吾だ。カウスミケイコ一応、アタマ張ってるモンだ」

「あんたが、アタマなのか？」

春樹の頭の中に、クエスチョンマークが点灯した。

「今はな。前までアタマ張ってた奴は、喧嘩のできねえヘタレ野郎に成り下がっちゃったからな。前のアタマの名前くらいは、知ってるだろ？」

川澄はワンプテンポ置いてから、以前のアタマの名前を出した。

「……水島太陽」

「一応は、ね」

突っ立ったままの春樹は、腕を組みなおした。

「そこでだ。お前をスカウトした理由……解るだろ？」

「要は、水島太陽の首を獲って来いって事が……」

春樹がそう言っと、川澄の口元がニヤリとした。

「喧嘩のできねえアタマじゃ、下の連中に示しがつかねえ……そう
だろ？」

それに、お前さんが奴の首を獲ってくれば、自動的に涼浪で喧嘩
最強って事になるしな」

その言い方は、春樹の癪にさわった。だが、川澄は構う事無く言
葉を続ける。

「お互いに見返りはあるぜ。……悪い話じゃねえだろ？」

何よりも、喧嘩最強と言われて決して悪い気はしなかった。

「……」

「どうだ。お前が俺ら側につけば、涼浪だけじゃねえ。ここいらの
ヤンキー校、全部落とせるぜ？」

「……いいぜ」

川澄の提案に、春樹の首は縦に動いた。

「だがよ、これだけは言っとくぜ。あくまで手を組むだけだ。俺は、
あんた等の下に付くわけじゃねえ」

春樹は川澄達を指差して、強い口調でそう告げた。

「……まあ、いいだろう。期待してるぜ」

川澄の言葉を聞くと、春樹は振り返って一直線に割れた人垣の真
ん中を歩き、パルスのドアの向こうに消えていった。残った三年生
達は、ドアの外を見ながら口を揃えてこう言っていた。

「クソ生意気だな。あの一年……」

「ホントだぜ。中坊で、どれだけ強かったかしらねえけど」

「フクロにしちまうか？」

それを聞いた川澄が、周りの不良たちに口を挟んだ。

「まあ、今は好きに言わせておけばいいぜ」

「……でもよ、川澄君。水島をあの一年が潰せるとは思えないけど
……」

「バーカ。どの道、水島とあのデカがやりあえば、どっちかは無事

には済まねえだろうからよ……。それに、タイマンが終わってからにでも、フクロにすりゃあいいだけの話だ……」

川澄は、低く嘲笑を浮かべていた。

そして、翌日。友成と雄太の、朝の馴染んだ登校風景。学校まで、あと数分歩けば到着するだろう。

「……んで、そのDVDセットいらしたんだよ？」

友成は、昨日の雄太の放課後の事を聞いているようだ。

「ニツキュッパー。安いもんだ」

雄太の顔は、この上なく幸せそう。友成の目には、そう映っていた。

「……アホじゃねえのか」

「特典付だったんだよ。セーラー服、あと生徒手帳に……」

特典付きのDVDセットの事を自慢げに話す雄太だが、友成の表情は呆れるを通り越して、諦めていると言う方が正しいかもしれない。

「セーラー服なんか、着る機会なんかねえだろうが」

「紺のハイソックスは、外せないパンツだよ。コスプレセットにはさ」

「……お前、まさか着るのか？」

友成は、啞然としながら雄太に聞いてしまう。

「女装はしないさ。でも、コスプレって結構楽しいぞ。一回やってみるか？」

「……ま、興味は有るけどな。やる機会がねーっての」

友成は、少し恥ずかしそうに答えたのだった。

他愛もない会話を続けて、校門の前まで着くと、見慣れた大柄な男が立っていた。

その姿は、春樹に間違いはなかった。ただし、服装が制服ではなく、迷彩柄のパンツに赤いスカジャン、スニーカーの組み合わせ。どう考えても私服であり、学校に来る為の服装とはかけ離れている。

「よう、友成に雄太!!」

春樹の挨拶は、基本的に朝に弱い不健康不良少年にしては、随分とハイテンションな物だった。

「よう……って、お前なんで私服なんだよ?」

友成は言葉は、早速疑問系になっていた。通学時間に、私服で居る事自体が、サボる気満々としか言えない。

「……さては、サボってメイドカフェに行くつもりだな?」

雄太は無意味な確信を持った表情で、春樹を指差した。

「それは無い!!」

雄太の回答には、二人そろって突っ込んだ。

鋭い突っ込みの後、春樹は一度咳払いしてから、改めて言葉を続けた。

「……なあ、友成。俺ら、真面目に勉強する様な奴じゃねえだろ?」

「俺ら……つつても、いきなり何言ってんだよ」

「昨日も話したじゃねえか。俺とお前で組めば、無敵だつてよ」

春樹は、友成の表情をジッと見つめた。その目付きは真剣そのものであり、決して冗談で口を開いている訳ではない。友成は、そう直感した。

「……んで、おめえは何がしてえのよ?」

春樹は一呼吸置いてから、本気の表情でこう言った。

「俺とお前で、ここらのヤンキー校、全部オトしてみねえか?」

「……」

「俺とお前なら、ここらのヤンキー校だけじゃねえ。この沿線沿いとか、県内のヤンキー校、全部シメる事も出来るぜ?」

春樹の言葉を聞いた友成は、無表情で返答した。

「……バーカ。お前さ、漫画みてえな事言ってるじゃねーよ」

友成の表情は渋くなり、全く話に乗る素振りを見せなかった。

「……ま、お前の場合はそう言うとは思ってたけどな。気が変わったら、何時でも連絡してくれよ!!」

春樹は、意味深な微笑を浮かべて、学校を立ち去った。

「何なんだ、アイツ？」

「さあな。何考えてるのやら……」

残った二人は、春樹の行動に疑問を感じずにはいらなかった。その日の授業は、友成の頭に殆ど入らなかった。もともと、普段から大して頭に入っていないのだが。

兎に角、春樹の一連の行動が気になつて仕方が無かった。

（……あの馬鹿、他の高校に喧嘩でも売りに行く気か？）

思いつくを、片っ端から思い浮かべるが、殆ど喧嘩に絡む事しかない。そんな事を考えながら、一日中窓の外を眺めていた。

「……しゃーなーな」

友成の口から、ポツリと言葉がこぼれた。

「早瀬君、何がしょうがないんですか？」

友成の席の目の前には、担当の教諭が仁王立ちしていた。

「……あれ？」

「……では、この問題をやってもらいましょうか」

教諭に言われるがまま、黒板の前に立ち問題に挑む。

「……えっと……解りません!!」

案の定だが、友成の頭脳では、問題を解けなかった。例により、友成は教諭から注意を喰らったのだが、その注意も上の空になっていた。その後、席についた友成だが、やはり窓の外を眺めてしまう。そして、放課後。ホームルームが終了すると同時に、友成は鞆を肩に掛ける。

「今日、用事出来たから。そんじゃ!!」

一言だけ言い残して、教室を飛び出していった。

「友成の奴、随分急いでたな」

「普段は、めんどくさがりの癖にね」

空席になった友成の席を眺めながら、雄太と彩は首を傾げた。

日はすっかり傾き、建物の壁はオレンジ色に染まっている。友成は携帯電話を片手に、繁華街を歩いていた。

「……ツチ。どこ歩き回ってんだよ」

リダイアル履歴の画面を見て、思わず舌打ちをした。駅前通りや裏道等を歩き回り、春樹の姿を探すものの、未だに見つけられない。携帯電話の発信やメールを送ったりしたのだが、返ってくる気配は一向になかった。

「……ったく。向こうから連絡よこせ、つってたくせによ」

思わず、不満の言葉が漏れてしまう。友成は、とにかく春樹と話を付けようとしていた。確信は無いのだが、直感的に話す必要がある。そう考えたからに、他ならない。しかし、探し続けるものの、一向に見つかる気配は無かった。

時刻は午後十時を過ぎ頃。繁華街の電灯は殆ど消えて、暗くなった路地を出歩いている人影は皆無だった。バイト帰りの太陽は、一人歩いている。

電柱に括り付けられる、街灯が切れかかっているせいなのか、チカチカと点滅している。そのうす暗い光の下に、腕を組んだ一人の男の姿を、太陽は確認した。紛れも無く、太陽の方を見ていた。

「……なんだ？」

太陽と、男の視線が交錯する。そして、男は鋭い目つきをしてこと言った。

「あんたが涼浪の三年、水島太陽だな？　ここで張ってれば、会えると思ってたぜ」

そう聞こえた太陽は、顔が確認出来る程度の距離まで歩み寄った。身長は高く、太陽の視線は見上げる形になっていた。

「……お前、たしか一年の……手塚？」

「ああ、手塚春樹だ」

春樹の顔は、実に殺気立っている。

「一年坊主、随分元気がいいじゃねえの……」

太陽は春樹を鋭く睨みつけたが、決して臆する様子は見受けられなかった。

「ああ、強い野郎と喧嘩するのが生き甲斐でね」

春樹は、そう言つて指をポキポキと鳴らした。

「アンタ、俺らみてえなのが下に居るとウゼエだろ？」

「……おめえ、どういふつもりよ？」

「俺がアンタを……引退させてやるよ!!」

春樹は太陽を目掛けて、拳を振りかぶった。右拳が、太陽のテンブルを目掛けて、勢いよく打ち下ろされた。

「……!!」

——ガシッ!!

ぶっ飛んできた右拳を、太陽は難なくガード。

「オラァ!!」

——ブンッ!!

春樹は続けて、左フックを放つ。太陽はスウェーバックで避け、春樹の左は空を切った。

「あつぶねえな……」

太陽の口から、思わず言葉が漏れた。ガードした左腕が、ビリビリと痺れている。

「……逃げるのは、上手いみてえだな」

そう言つと、春樹は再び殴りかかった。

「ブンッ!!」

今度は左ストレート。太陽の顔面目掛けて、真っ直ぐ飛んでいく。

(……丸見えだよ!!)

太陽はパンチの軌道を読んで、両手でガードをしたが。

——ガンッ!!

打撃音と共に、ガード越しにも関わらず、太陽の体が吹っ飛んだ。想像の遙か上に行く強烈なパンチ力に、バランスも体制も崩れてしまった。

「……!？」

その瞬間、太陽の顔面はがら空きになった。そして春樹は、構うことなく太陽の顔面に右拳を叩き込む。

——バキィッ!!

「ぐはあ……」

春樹の右フックをともに喰らった瞬間に、太陽の膝がガクンと折れる。春樹は追い打ちと言わんばかりに、更に左ショートフックを叩き込んだ。

——ゴツッ！！

太陽の顔面が跳ね上がると、地面に膝を着いた。鼻と口元からは、血が流れ出ていた。

「……え、エライ強烈なパンチだな」

太陽は痛みで顔を歪めながら、春樹を見上げた。

「……お前、ナメてんのか……コラア！！」

春樹は怒りに表情を染め、太陽の胸倉を掴んで、無理やり立たせた。

「……なんで、殴ってこねえんだよ！！ アンタはアタマ張ってたんじゃないのかよ！？」

「……」

太陽は何も答えない。

「答えろよ！！ そのまま、病院送りにされてえか！！」

春樹は、凄まじい剣幕でまくし立てた。

「……俺は、もう人を殴れねえからよ」

太陽は力無く微笑した。その諦めたような表情は、春樹の逆鱗にふれた。

「……だったら、お望みどおりに……顔面グシャグシャにしてやるよ……」

胸倉を掴んだまま、右拳を振り上げた。太陽は、右拳の軌道を見て腹を括った。

（……こりゃ、痛そうだな）

しかし、春樹の拳が、太陽には届かなかった。

「……！？」

春樹の右腕は、誰かに掴まれた状態で、止まっていた。

「……オメエ」

春樹の腕を掴んでいたのは、友成だった。そして、静かに春樹を睨みつけている。

「……春樹。お前、何してんだ？」

友成の発した言葉は、実に静かな物だった。それは、春樹にとって逆に不気味と思えるようなものであった。

それでも春樹は構うことなく、友成の手を乱暴に振りほどいた。しかし、太陽の胸倉を掴んでいた手も、つい離してしまったであった。その瞬間、ダメージを負っている太陽は地面に片膝を着いてしまふ。

「涼浪のアタマと、喧嘩してんだ。邪魔すんなー！」

友成に向けて、強い口調で春樹はそう言った。

「……」

——バキィー！！

友成は返事をしないまま、春樹を思いっきりぶん殴った。不意打ちに近い状態で殴られた春樹は、思わず尻餅を付いた。

「……テメエ、どういうつもりだ！？」

口元から出た血を拭いながら、春樹は友成を睨みつけた。

「……お前がバカなのは解ってたけどよ。ここまでバカとは、思わなかったぜ」

友成は、見下ろしながらそう言った。

「……何だと、テメエー！！」

「……おめえよ、太陽先輩が殴ってこねえって事、おかしいと思っ
てねえのか？」

喧嘩できねえのなら、理由が有るって考えねえのか？」

「……」

友成にそう言われた瞬間、春樹は反論の声を出すことすら出来なかった。ただ、自分の唇を噛むしかない。

「この人の親父さん、今入院してんだよ。だから、バイトも学校もクビになれねえ。問題起こして、パクられるわけにもいかねえんだ」
「……」

友成は、春樹に一步だけ歩み寄った。

「……そもそもお前はよ、無抵抗の人間殴って喜ぶような野郎じゃねえだろ？」

友成のその口調は強くもありながら、どこかで諭している様な。その言葉が、春樹の胸中に、響いている。

「……チッ」

春樹は不機嫌そうに舌打ちをして、立ち上がった。そして、二人に視線を合わせようとせずに、反対方向に歩き去っていった。春樹が薄暗い街路地へと姿が消えてゆくのを、友成はジッと眺めていた。

姿が見えなくなる頃に、太陽との会話を始めた。

「太陽先輩、大丈夫ですか？」

友成は、地面に座り込んでいる、太陽に手を差し出した。

「……何とかな。しかし、久々に強烈なパンチ食らったぜ」

太陽は、引き上げられるようにして、よっこらせと立ち上がった。足元は、まだ若干フラフラしている。

「しかし、アイツ……。何で、いきなり太陽先輩を狙ったんだ？」

友成は、太陽に肩を貸しながら、首を傾げてしまう。

「多分、川澄の野郎だな……。アイツが、手塚をそそのかしたんだろ？」

「川澄……誰ですか？」

「涼浪の三年の奴さ。俺のことを嫌ってるからな。多分、俺を潰して涼浪を仕切りだいんだろ？」

吐き捨てるように、太陽は言った。

「……だったら、直接叩きや良いじゃねえか」

友成は、呆れたように言葉を出した。

「それは無理だな。三回喧嘩して、全部ボロボコにしてるからな」

「……納得」

友成は、太陽に肩を貸した状態で、ゆっくりと帰宅したのであった。

?

弐話 涼浪の先輩方（後書き）

彼らは、どうやってタバコを買っているのかって？
想像にお任せします。

参話 意地を張る奴ら

翌日。時刻は、既に正午を過ぎている。春樹は学校には顔を出さず、河川敷でひたすらボーっとしていた。

寝そべっている側に、昼食のカップ麺のゴミと何本かの吸殻の入った、ビニール袋が転がったままだ。

新しいタバコに火を着けて、肺に流し込んだ煙を吐き出す。ユラユラと景色の中に消えてゆく、煙を眺めていると、友成の言っていた一言が不意に頭に浮かんでくる。

（……俺は、何がしたかったんだ？）

成り上がる。それは、単に喧嘩が強ければ良い訳ではない。

勿論、喧嘩の強さも比重になる場合もあるが、それ以上に慕ってくる奴らが居るかが、重要になるのだらう。

なにより慕ってくる人間と言うのは不思議なもので、中心人物の元に自然と集まってくるのである。単に、腕力や財力にものを言わせて集めても、結局は離れていってしまのである。

そんな事を思い浮かべていると、気が付いたら自己嫌悪になってしまっていた。

（……チツ、らしくねえな）

春樹は、苛立っていた。それは誰の他でもない、自分自身に対してだ。あっさり、踊らされた自分自身に対して、どうしようもない苛立ちを抑えきれなかった。

気晴らしに、何気なく川沿いのグラウンドに目を向けた。

「……ガルルル」

黒い犬と、白い犬。二匹の野良犬が、睨み合っていた。片方の黒い方の犬は、体格も大きく見るからに強そうだ。

もう片方の白い犬は、二回り近く体が小さかった。それでも、小柄な方の野良犬は、大きな犬に負けてたまるかと、威嚇し続けた。

(……)

春樹は呆然と眺めてしまった。そして、二匹の犬は噛み付き合いの喧嘩を始めてしまった。

黒い犬の方が、圧倒的に強かった。白い犬は、あっさり蹴散らされてしまう。それでも、小さな犬は、何度も何度も立ち向かっていった。

果敢に立ち向かっていった末、小さな犬が、ついに大きな犬の首元に食らいついた。強引に振り回されても、喉に噛みついた口を決して離さなかった。大きな犬はついに、根負けしてしまい、キャンキャンと情けない鳴き声を上げて、何処かに走り去って行ってしまった。

(……ちえ。俺、犬よりカッコ悪りじゃねえか……)

一部始終を見ていた春樹の口から、舌打ちが自然に出てしまった。そして、スクリと立ち上がった。

(……やったるか！！)

春樹は、覚悟を決めて河川敷を立ち去った。

同時刻、涼浪高校。

友成は、昼食時間帯を返上して、体育館裏に来ていた。もつとも昼食自体は、四時限目が半分過ぎた時点で、完了していたのだが。

ここに訪れた理由は二つあり、一つ目はタバコを吸いに来たという事。もう一つは、春樹の足取りを探しに来たのである。

「……やっぱ、来てねえか」

1. Bの不良生徒や、春樹の知り合い達に情報を求めた。しかし、収穫は丸で無く、どこに居るかも見当はつかないとの事だった。

(あの馬鹿、また無茶苦茶な事してんじゃねーよな……)

体育館裏で一人になった中、無い知恵を振り絞って、思い当たる節を考える。しかし、どれもこれもいい予感はしなかった。

容量の少ない脳みその中で、色々と思いを張り巡らしている中、タバコの煙を吐き出すと誰かが友成の肩を誰かが叩いた。

「よう、随分考え込んでるな。らしくねえな」

振り向くと、太陽の右手が肩に乗っていた。

「全く、お前といい春樹といい。何か気になるなら、俺にも声をかけてこいよ」

今度は雄太が、両腕を組みながら、そう言ってきた。

「太陽先輩……。雄太も」

友成は、ハツとしたように二人と視線を合わせた。

「ちよつと、今日は気になることがあつてな」

太陽は、思い当たる節があるかのように口を開いた。

「今日よ。川澄と、その取り巻きの連中。誰一人きてねえのさ」

友成と雄太は、黙ったまま聞いている。

「……何も無きや良いけど、多分そういう訳にもいかないだろうな」
太陽の見せた苦笑いは、何処か自嘲的。そういう風に、二人の目には映った。

友成は、少し考えた様な素振りを見せると、吸っていたタバコを自前の携帯灰皿に吸殻を入れて、口を開いた。

「……今の話聞いて思った。多分だけど……。春樹は、川澄って奴の所に殴りこむと思うぜ」

「……ほう」

友成の言葉に、太陽は相槌を打ち、雄太は何も答えずに聞いている。

「アイツは、バカだけど……。多分、まっすぐなバカだからさ。裏で手を回すとか、誰かを利用するとか……。そういうのが嫌いな奴だと思う。」

大体そういう奴ってさ、何でも自分で抱え込んでしまうんだ、きつと。悪い人間じゃないけど、かなりバカだろ？」

友成は、そう言い終わってニヤリと笑った。

「そんで。お前は、どうするつもりなんだよ？」

雄太は、意図的にそう聞いた。雄太自身、友成がどうしたいのかは、すでに解ってる様だった。

「……決まりだな」

太陽も、友成の考えを察していた。そして、その考えには乗り気だった。

「ん……、待てよ。太陽先輩は、不味いんじゃないっすか？」

友成は、思い出したように言いながら、あごに手を当てた。

「確かに、下手にばれたら……退学になるかも知れないですし……」

雄太も、一度賛成した意見を、撤回せざるおえなかった。

「でもよ……」

太陽は、ある種の覚悟をした目をしていた。

「手塚を巻き込んだのは、俺がウダウダしてたのが原因みたいなもんさ。」

だから、川澄とは俺自身の手で蹴りをつけないと、いけないと思うんだ」

言い終わった、太陽の顔は晴れやかなものだった。憑き物が落ちた様にすっきりした表情で、そう言ったのであった。

「……ったく、アンタもしょうがない人だな」

さすがの友成も、少々呆れたように言った。

「とは言っけど、何かで顔を隠せば良いんだけど……」

雄太は、そう言っつつむいた。

「顔を隠す……。良い事思いついた!!」

その瞬間の友成の表情は、二人が生涯忘れること無いほど、怪しく不敵。何よりも、不気味な笑いを見せていた。

時間は経過して放課後。ホームルームが終わると同時に、友成、

雄太、太陽は真っ先に帰宅。そして、三人は雄太の自宅前に直行したのであった。

「……なあ、友成。なんで俺の家に、集合したんだ？」

雄太の顔には、クエスチョンマークが点灯している。

「それはだな。雄太に、アレを借りようと考えたわけさ」

友成は、再び怪しげな笑顔を見せ、人差し指をピシッと立てていた。

「さつき思いついたんだけど……まさかとは思うが」

太陽の表情は、随分と強張った笑顔を浮かべる。

「そう。雄太の持つてるコスプレ衣装に、戦隊物の衣装。あるだろ？」

友成は、満面の笑みで雄太の肩を、ポンと叩いた。

「うーん……。レッドのセットは有るけど、戦隊物はそれ一個しか無いぞ？」

雄太は腕を組み、視線を下げながら答えた。

「イヤイヤイヤ……。そんなもん着るなら、顔がばれた方がイイ……」

太陽は、全力で拒否した。イベントでも無いのにコスプレするのは、相当に恥ずかしい事に違いない。

「ダメだって。太陽先輩だけは、ばれないようにしなきゃ!!」

友成は、力強くそう言った。友成の中で、顔を隠す為に真剣に考えた結果なのだろう、多分。

「大丈夫ですよ。なんなら、先輩だけ怪しくないように、俺たちもコスプレしますから」

雄太も、そう説得を試みる。説得と言えるのかは、随分と微妙なのだが。

少し考えてから、太陽は口を開いた。

「……せめて、覆面レスラーの方がマシだったぜ」

観念したように、そう言った。それを聞いて、友成と雄太は、笑って顔を見合わせたのである。

「ところでさ、お前らもコスプレするんだよね？」

愚痴るようにつぶやく太陽。二人をみるその顔は、もはや呆れていた。

「俺は、イベントでよく着ているから、大丈夫です」

雄太は、当然とばかりに、ニヤリと笑った。

「俺、一回コスプレしてみたかったから。言われなくても、着るっすよ」

友成は、満面の笑みで、グーサインを出した。

(……こいつらも、とんでもなくバカなのかもな)

太陽は、ヤレヤレと深くため息を吐き出した。

午後八時。春樹は一人で、パルスへ向かって歩いていた。その表情は、さながら戦地に行く兵士のように、殺気立っていた。そして、薄汚れた壊れかけのドアの前に立ち、一度大きく深呼吸。

(……おーし、行つたらか!)

意を決して扉をけ破ろうと足を振り上げた。

——スカッ!!

「……おろ!?」

蹴りを放つと同時に、ドアが急に開いていた。そのまま、勢い余って春樹は転倒しながらパルスの店内に入ってしまう。

「……いつてえ」

転がりながら、入ってきた手塚を、店内に居た全員が春樹を凝視した。

「……何だコイツ?」

ドアを開けたであろう男は、呆れながら春樹を見下ろしている。

「……カッコわりいな、俺」

自嘲的に呟きながら、春樹は立ち上がって、服をパンパンと叩く。そして、スウと息を吸って、大声で叫んだのだ。

「喧嘩の時間だ、オラァ!!」

その瞬間、パルスの店内は異様な雰囲気醸し出す。川澄と、取り巻きの不良達と、春樹一人が対峙する形になった。

「……手塚。水島をやれないならまだしも、俺らにたて突くとはな」
ソファ―に腰をかけた状態で、川澄は牽制の言葉を放つ。

「俺はよ、手を組むだけって言ったはずだぜ。お前らの仲間に、なつたつもりなんざ無えんだよ」

春樹は、少し距離の開いている、川澄を見下ろしながらそう言った。

「クツクツ……。お前、馬鹿だろ？」

川澄がそう言うと、春樹の周りを何人もの不良が取り囲む。形成された人垣に、逃げ道は丸で無い。

「お前、ここに何人居ると思ってんだ？ お前一人で、俺ら全員潰すつもりか？」

川澄は、いやらしく言った。春樹を囲み込む不良達は、少なくとも見ても二十人は居るだろう。

「逆に言っちゃえば、全員潰せりゃあ俺が涼浪のアタマって事だろ！……」

春樹は、強い口調で、啖呵を切った。

「……このガキが。お前ら、この馬鹿に解らせてやれ！！」

川澄の指示で、取り巻き達は一斉に春樹に襲い掛かる。

「そりゃあ！！」

——バキィ！！

春樹は何の躊躇もなく、一人目の顔を殴り飛ばした。

「……テメェ！！」

一人が左後ろから殴りかかってきたが、春樹は薙ぎ払って、すぐさま裏拳を放った。カウンターで入った分、相手は倒れてからピクリとも動かない。

「まだまだあ！！」

更に、別の不良の顔を殴り飛ばし、続けて殴りかかって来た不良も、体を前蹴りで吹っ飛ばした。しかし、一人を殴れば、別の拳や蹴りが飛んでくる。敵だらけの中で、ひたすら拳を振るって、目の前の不良共とひたすら張り倒していく。

「フンガァ！！」

気合の雄叫びを上げて、襲い掛かってくる不良をなぎ倒して行く。

——バキィ！！

——ドガッ！！

——グシャァッ！！

バーの中に、打撃音が響き渡る。修羅場と形容しても、全く差し

支えは無い程の様相だ。

（……クソツタレ、キリがねえ）

思わず、舌打ちが出てしまった。いくら春樹がタフと言っても、相手の数は多すぎた。とは言え、ここまで来てしまえば、既に後には引けないのも事実だ。

「この、クソガキ!!」

春樹を目掛けて、飛んできた右ストレート。

——パシッ!!

しかし、左手であっさりと受け止める。春樹は右手で髪の毛を掴んで、腕力に任せてブン投げた。

「オラアッ!!」

——ドガアアッ!!

投げられた方は、床にと沈んだまま動かなかった。が、しかし。

——バキヤアン!!

春樹の頭部に、強い衝撃が走った。投げ技による、大きな隙が出来てしまった瞬間だった。

「グウ……」

春樹は、片膝を付いてしまった。ビール瓶で頭を殴られたのだ。

「……手こずらせやがって」

春樹のすぐ後ろに立つ川澄の手には、粉々になったビールが瓶握られている。

「……キタネエぞ」

「なんだと……。喧嘩にキタネエもクソも、あるのかよ!!」

——ガッン!!

川澄の前蹴りが、春樹の顔面をジャストミート。春樹は、床にドサツと沈んでしまった。

「……たった一人に、ここまでやられるとはな」

取り巻きの不良達の、三分の一が春樹により、倒されている。

「……そりゃ、だてに大魔神って呼ばれてた訳じゃねえからよ」

春樹は、そう言いながら、なんとか上体だけは起こした。しかし、

額と鼻からは血が流れており、ダメージを受けているのは明らかである。

「この野郎……。オウ、鉄パイプ持って来い!!」

取り巻きが持ってきた鉄パイプを、川澄は引っ手繰る様に手に取って、鉄パイプを装備した。

(……流石に、アレ喰らったら痛えよな……)

上体を起こしているとは言え、素早く避けるほどの体力は既に無い。

「しばらく、入院してきな!!」

川澄は、鉄パイプを振り上げる。狙いは、春樹の鎖骨だ。

(……ツチ。動けねえわ)

春樹は、観念したように動かなかった。

そして、川澄が凶器を振り下ろそうとした瞬間だった。

——ドガアッ!!

「なんだ!？」

その場に居た、全員が音の発生した場所を振り向いた。

破壊されたドアが床に転がっており、ドアのなくなった入口には、三人の怪しすぎる男が立って居た。

「春樹、まだ生きてるか？」

カチューシャを付け、何故かセーラー服を身にまとっている友成とある深夜アニメの、ヒロインのコスプレ姿である。

生足は流石に恥ずかしいのか、スカートの下には学生ズボンを着衣している。コスプレ的には、かなりアンバランスである。

「助太刀に来たぜ」

何故か、ブレザーにネクタイを付けた雄太。これは、友成と同じアニメの主人公のコスプレ衣装だ。こちらは、正規のコスプレである。

「……」

あとの一人は、無言のまま腕を組んで仁王立ち。今度は、戦隊物のレッドのコスプレ姿だ。正体は太陽なのだが、覆面をしている為、

川澄達から見れば正体不明の状態だ。

「……なんだ、このバカ共は？」

川澄は、呆れながらそう言った。

「あの、女装してる奴……早瀬友成ですよ！！」

一人の不良が、友成の事に気が付いた。

（……アイツ、何ちゆうアホな格好してんだ？）

春樹も、呆然としてしまった。正直、助太刀はありがたいのだが、もの凄く他人の振りをしたい、恥ずかしい気分になってしまう。

「……まあ、いい。お前ら、あいつ等もまとめて潰せ！！」

川澄の支持と共に、複数の不良が三人に襲い掛かった。

「……そらあ！！」

——バキィ！！

友成が向かってきた、一人の顔面を蹴り上げた。

「……この、チビが！！」

友成を背後から殴りかかったが、太陽が横から入って、パンチをなぎ払う。そして、右拳を一閃。

——ドゴォォ！！

太陽のパンチを喰らった男は、軽く一メートルは吹っ飛んだ。

「……さすがっすね」

「まあね……」

太陽は得意げに言うが、覆面のため表情は全く見えない。

「セイツー！！」

——ズドン！！

雄太も不良に向けて、正拳突きで、攻撃を仕掛けた。

「……この野郎！！」

攻撃を喰らった不良が、顔を歪めながら、雄太に反撃した。

「……おつとつと」

左にサイドステップして、反撃をかわす。不良の体が大きく泳いで、顔面が隙だらけになってしまう。

「……ッシヨッ！！」

——スパアン！！

雄太の掌底打ちが、不良のアゴを打ち抜いた。

「一応、空手段持ちなんでね」

雄太は、不良に向けえて、得意げにそう言った。

——バキィ！！

しかし、喧嘩の最中に油断は大敵。言ったそばから、別の不良のパンチを思いっきり喰らってしまった。

「……い、痛いね」

雄太は、殴ってきた不良をマジマジと見た。

「お前が、調子こいてるからだろぅが！！」

不良は、雄太に思わず怒りながら突っ込みを入れてしまった。

——ドゴォ！！

しかし、その不良に向かって、別の蹴りが飛んできた。不良の体は、思いつきり吹っ飛ばされていた。

「……喧嘩に、集中しろつての」

蹴りをぶち込んだ友成は、呆れたように雄太に言った。

「ああ、スマンな……」

雄太は、気を取り直して、構えをとった。

「春樹い、テメエも根性見せやがれ！！」

友成はそう叫びながら、別の不良を目掛けて拳を放った。

チツと舌打ちをして、春樹は足元がふら付きながらも、気合いで立ち上がった。両手で、自分の頬を一発張って、ファインディングポーズを構えた。

「おっしやあ！！」

雄たけびを上げて、目標の不良目掛けて、拳を振りかざした。

援軍の加入で、形勢は一気に逆転した。二十人近くいた不良たちも、後は川澄一人を残すだけになっていた。

「……やっぱ、喧嘩は好きじゃないな」

雄太は手持ちのポケットティッシュで、鼻血を拭きながら言った。

「いや、上等だろ」

春樹は、首をグリグリと回しながら、得意げに言う。

「あと一人だな」

レッドマン太陽が、川澄を睨みながら言った。くどい様だが、表情は不明のまま。

「楽勝っすね、太陽先ぱ……」

友成は言葉を言いかけの状態で、顔を固めてしまった。

「……何？」

川澄はレッドマンを凝視した。

「あ……」

雄太は、呆然としながら友成を見た。

「……マジ？」

春樹も、レッドマンに視線を移した。

「……」

太陽は、友成の方向に顔を向けた。

「……あぁっ……」

友成は、改めてリアクションを取った。普通に太陽の名前を呼んでしまったのだから、折角の覆面作戦はぶち壊しである。

「馬鹿！！ 名前呼んだら、台無しじゃねえか！！」

動揺してしまった太陽も、思わず叫んでしまう。

「……アホ。ここまでやって、ドジるなよ……」

雄太も、額を押さえて、ハアとため息を吐いた。

「……あの人、やつぱ強えんだ」

太陽の正体が解ると、春樹は関心したようにそう言った。

「……水島。わざわざ、マヌケな覆面付けて喧嘩しにくるとはな」

川澄は、レッドマンをマジマジと睨みつける。

「……くそ。バレたんなら、仕方ないな」

太陽は覆面を脱ぎ捨てると、川澄に一步步寄り寄った。

「てめえを、涼浪のアタマから、引きずり降ろしてやるよ……」

川澄も歩み寄って、太陽と間合いを詰めた。そして、そこからは

一瞬の間の出来事だった。

川澄が右ストレートで、先手を打った。

——ブンッ——

川澄の右拳は、空を切った。太陽はヘッドスリップでかわすと同時に、右のアッパーを繰り出した。

——ゴキッ——

強烈なアッパーが、無防備になっていた川澄のあごを撃ち抜いた。太陽の拳が突き刺さった瞬間に、川澄は床に膝から崩れ落ちていった。

「……一瞬だったな」

春樹は、ゴクリと生唾を飲んだ。

「……太陽先輩にや、俺も勝てねーよ」

友成も、強張った表情でそう言った。

「俺さ、太陽さんと同じ空手道場に居たから、威力はよく解るよ。

あんなパンチ、まともに喰らったら死ぬぞ……」

雄太は、崩れ落ちた川澄を見ながら言った。表情は、二人と同様に随分固い。

「……」

太陽は何も言わず、川澄を見下ろしたまま動かない。

「……クソツタレ」

川澄は、崩れ落ちた状態から、僅かに体を起こした。

「水島あ……。何で、てめえは喧嘩しねえんだよ……。お前ほど、強え野郎はそういねえだろうが……」

「……」

「……答えるよ、水島あ」

川澄の発する言葉は、寂しげに部屋に響いた。

「……川澄。お前の言いたい事は、解らなくもない。でも……喧嘩して“護る物”すら、無くしちまったら意味が無いんじゃないのか？」

「護る……物だと？」

「……俺の場合は、家族だけだな。これ以上、家族に迷惑かける訳にはいかないんだよ、俺はな」

「……」

「護るものが有ると無いとじゃ、気合いの入り方も変わるもんさ。正義の味方振るつもりは無いけど、俺は護る事の為の喧嘩以外はしたことが無い。」

お前にそれが解らないなら、お前は俺には一生勝てないぜ」

太陽の言葉に、川澄はそれ以上何も答えなかった。

「……おっし。お前ら、帰るぞ」

太陽がそう言うのと四人は順番に、ドアの壊された入口の向こうへと消えて行ったのだった。

「護る……。俺には、何が有るっていうんだよ……」

残った川澄は、グシャグシャで、修羅場の様な店内を見渡した。

そして、川澄の視界に入ったのは、倒されている自分の仲間達だった。

（少なくとも……こいつ等は、水島じゃなくて俺についてきた。……もっと早く、気づくべきだったのか？）

川澄は、フツと笑って仰向けに寝ころがった。ひんやりとしたベニヤ板の床が背中に触れる感触。川澄にとって、それが少し気持ちよかった。

パルスを後にした四人は、繁華街に向かって歩いていった。街の明かりはすっかり落ちて、冷たい風が街全体を撫でる様に吹いていた。

「あー。暴れたら、腹減ったな……」

パルスを出ると、友成が真っ先にそう口を開いた。

「確かに。牛丼でも食いに行くか？」

雄太は思いついたように、そう言った。考えの方向は、友成の意見に同意しているようだ。

「そうだな。この時間なら、空いてるだろうしな」

太陽も、食事の意見には乗り気で答えた。

「俺、口の中ズタズタだぞ……」

口の中が切れている春樹は、あまり乗り気にはならなかった。恐らく、飲み物だけでも、結構辛いのだろう。

「おや、無敵の春樹君も、口の中が切れてて物が食べれないんですね」

友成はニヤニヤとして、茶化すように言った。

「……んなことねーよ。唐辛子入れたって、平気で食えるっつーの！！」

春樹がムツとしながら、言い返した。

「おーし、決まりだな。春樹は、激辛のカレー丼で！！」

「ふざけんな、テメー！！」

一悶着あったものの、こうして四人の夜は更けていった。なお、全員傷だらけの上に、内三人の衣装がコスプレ。

一人だけが学生服だが、この雰囲気ではコスプレに見えてしまうのが現状と言える。自分たちの格好の事を忘れて、入店した牛丼屋の店内で、異常な雰囲気を出していた事は、言うまでも無い。

三日後の昼休み。

昼の弁当をサツとたいらげた友成は、太陽に呼び出されて屋上に向かっていた。屋上への入り口の塗装の剥げた鉄のドアを開けると、太陽は手すりに持たれながらタバコを吹かしていた。

「どもつす、太陽先輩。話って何ですか？」

「よう、着たか」

太陽は肺に溜まった紫煙を吐き出して、友成を見た。太陽の含み笑いを見て、友成は疑問を持たずには居られなかった。

「……？」

一呼吸を置いて、太陽が口を開いた。

「もしよ、友成。これから涼波アタマを、お前に任せるって言われたらどうする？」

太陽はそう告げて、タバコをくわえた。

「そうっすね……」

友成は、腕組をしたまま下を向いた。
十秒ほど考えて、こう答えた。

「やっぱり、断るかな」

「ほう……。ココでお前にまともに喧嘩やりあえるのは、手塚が俺
くらいのもんだぜ？」

「うーん、上手くは言えねえけど……」

「……」

「アタマって、誰かにやれって言ってもんじゃないくて、やってる内に
自然と決まるもんだって思うんっすよ。俺アタマ張るとかって興味
無いっすから。それに……」

「それに？」

「めんどくさくなくて、楽しきゃそれでイイっすよ。俺はね」
友成は笑顔で、そう答えた。

「お前らしい考えだな」

太陽も、ニヤツと笑った。

その日の午後は、実に春らしい快晴で、爽やかな風が吹いていた。
？涼浪高校の新生入生達が、新しい一つの物語の始まりを告げるかの
ように、新しい風を吹きいれた最初の出来事。

そう、高校の三年間は、まだまだ始まったばかりなのである。
？

参話 意地を張る奴ら（後書き）

次回から、新章突入で、新キャラが登場します。
主要ヒロイン（の予定？）が、二人出てきます。

四話 委員長の頼み事（前書き）

新章突入です。

メインのヒロインも、新たに登場です。

四話 委員長の頼み事

桜の花びらはとつくに散ってしまい、木に付いた緑の葉っぱを風が撫でていた。

四月も終る目前。新しい生活にも慣れ始めて、ポカポカの陽気と大型連休を間近に控えた学生達の気分は、勉学に打ち込む気力を容赦なく奪い取っていた。翌日が祝日で学校が休みとなれば、尚更やる気は失せてしまう。

普段から勉強をする気が一切無い友成も、もちろん例外ではない。

「……良い天気だ」

ジジ臭い台詞を呟きながら、窓際の席でボーっと外を見つめる。

隣の席で、黒板に書かれた暗号を真面目に写す彩を見て、友成はニヤリと笑った。そして、ノートを一枚破り、シャープンを走らせて文字を書く。

それを彩へと、机の下から差し出した。

(……?)

友成から受け取った、ノートの切れ端には「このセンコー、世界史のくせに頭は落ち武者だよな!!」と乱雑な癖字で記入されていた。書かれた文字を読んで、思わず吹き出してしまいそうだったが、辛うじて息を飲みこむことに成功した。

彩が、隣の席の友成に目を配ると、ピースサインを出しながら笑う友成が居た。

授業終了後。彩は友成に、当然のように抗議を申し立てた。

「……アンタ、何であんなタイミングで邪魔するのよ!!」

「いや、ヒマでさ。さっきの先公の頭見てて、思ったんだよ」

事実、世界史の担当教諭の頭部は薄かった。

「……思わず笑っちゃいそうだったわよ」

「これで、あだ名は落ち武者に決まりだな」

「解るけど……失礼じゃない?」

友成と彩の一連のやり取りを見て、一人の女子生徒が声をかけてきた。

「二人とも、仲良いんだね」

スドウユカ

声をかけてきたのは、須藤由香。クラスの委員長である。

セミロングのヘアースタイルに、可愛いイルックス。加えて、何処かおっとりした性格で人気が高い。勉学の成績は申し分無いが、運動はそうでも無いらしい。

「由香ちゃん、勘違いしないでね。友成とは、ただの幼馴染なんだから」

「そーそー。言ってみりゃ、腐れ縁みたいなもんだ」

二人の言葉を聞いて、由香はホンワカとした独特の口調で、こう言った。

「幼馴染かー。うん、良いと思うよ」

ニツコリとした笑顔を見せる由香。見た目も相まって、可愛らしさは抜群。友成の心の内は、思わず押し倒したくなるような衝動に駆られてしまう。

（ヤベ……。超カワイイ……）

（あーあ、私も由香ちゃんくらい可愛かったらなあ。……それにしても、友成のバカは鼻の下伸ばし過ぎよ）

由香のおっとりとした、独特の雰囲気飲まれていると、ホームルームの時間が迫っていた。

「あ、先生来ちゃうから席に戻らなきゃ」

パタパタと自席に戻る由香を見て、友成と彩も席に座った。

ホームルームも終了し、帰宅部の友成と雄太に春樹が合流して、駄弁りながら下駄箱に向かう。ちなみに、彩はテニス部で由香は手芸同好会の部員と補足しておく。

「しかし、委員長の須藤由香ちゃん。可愛いよなー」

友成がポツリと呟いた。

「ああ。あの娘は、真剣に萌え要素が揃ってるよ。三次元だけど、

ギャルゲーに出てもおかしくなくらいだな」

雄太も、自身特有の価値観で同意した。

「そんな可愛いのかよ。その須藤って？」

クラスの違い春樹は、まだ由香と面識が無かった。

「マジ半端無いぜ。あの子と、部屋で二人つきりなら、百パー押し倒してるな」

「ま、お前がそうなる事はあるえねえけどな」

友成が興奮気味に言うが、春樹は鋭く突っ込みを入れた。

「でもよ、友成。お前、彩ちゃん何だかんだで一緒に居るだろ？」

雄太も、友成に指摘した。

「そっぴやそうだ。お前さては、ちゃっかり手出してやがるな」

春樹も雄太の意見を、後押しした。

「バーカ。彩とは、ただのご近所さんの幼馴染だよ」

友成はそう言う。

「……ふーん」

春樹は友成をジト目で見た。

「……へー」

雄太の顔は、弱冠呆れ気味の表情だった。

「……なんだよ？」

ふて腐れながら、友成は言った。

「フラグクラッシャー……」

これは雄太の弁。表情は、更に呆れを三割増しと言った感じが。

「……勿体ねえ」

これは春樹の弁。さっきより、尚更にジト目で友成を見下ろしている。

「……ちつ。とつとと、帰ろうぜ」

友成は、歩くスピードを早めた。

「アイツ、鈍感なのか？」

春樹は、雄太に聞いた。

「さて……。照れ屋で、捻くれ者なのは確かだけどね」

雄太はそう言うと、ヤレヤレと溜め息を吐き出した。

下駄箱に着いて、友成は自分の靴箱の扉を開いた。普段履いてる、安物のスニーカーの上に、可愛らしいファンシーな封筒に包まれた手紙が、堂々と鎮座していた。

（……これって、まさか！？）

一度扉を閉めて、靴箱の番号を確認する。

（……俺の下駄箱で間違いない。ってことは……）

友成は、手紙を手慣れたベテランのスリ師か、万引きの常習犯並みに素早くズボンのポケットにしまい、雄太と春樹に一言だけ告げた。

「スマン。高校三年間の中に、三回しかないチャンスの一回目が来たから、先に帰ってくれ。じゃー！」

そう言い放って、猛ダッシュで廊下の奥へと消えていった。

「……どうしたんだ、友成の奴？」

「解らん……」

取り残された二人は、誰も居なくなつた昇降口で、廊下をポカーンと見るしか出来なかった。

友成は、階段を二段飛ばしで駆け上がり、短距離走のスプリンター顔負けの速度で屋上に到着した。小動物の食事の様に、キョロキョロと周囲を見渡す。

すっかり誰も居ないことを確認した後、ポケットから少々しわの寄つた可愛らしい手紙を取り出して、中身の便箋を黙読した。

（えーと……）

手紙なんかで呼び出して、ごめんなさい。大事なお話をしたいので、午後四時に屋上に来て欲しいです。須藤由香……。

これって……）

友成は、嬉しさのあまり思わず雄叫びを上げそうになったが、まずは咳払いして、誰も見ていないのにクレバーに装った。そして、胸ポケットから携帯電話を取り出して、時刻を確認した。

現在三時三十八分、まだ二十分以上ある。

（まさかの、この時代にラブレター……。でも、あんなタイプの娘だしな）

友成は、落ち着くためにくわえたタバコに着火して、大きく息を吸った。

しかし、紫煙を一口吸った所で、友成の耳に甘ったるい独特の口調の声が、不意打ちで飛び込んできた。

「あ、友成くん。もう、来てくれたんだね!!」

驚いた友成は、思わず咳き込んだ。

「……ゲホゲホ!!」

吐き出した煙は、目と鼻に随分としてみた。

「友成くんって、やっぱり不良だからタバコ吸うんだね……」

首を傾けながら、真っ直ぐ覗き込む由香に、友成の心拍数はフルスロットルで上昇した。

（……ヤベエ、超可愛い）

友成は、まず落ち着こうと思いい口を開いた。

「あ、あのさあ……手紙に書いてた話ってさ。何なのカナ？」

全く落ち着いて居なかった。どれも気味な上に、口調までおかしくなっていた。

「あ……うん。これって、友成くんにどうしても伝えたくって……。実はね……」

由香の神妙な面持ちに、友成は期待せずにはいらなかった。

（この展開って……マンガとかドラマみたいに、好きですってくるのか!?!）

友成の頭の中には、薔薇色に染まったあらゆるシュチュエーションが浮かんできた。若干、思考回路は暴走気味と言っているだろう。「お姉ちゃんの事で、相談に乗って欲しいの……」

「解りました。謹んでお受けいたします……って、相談?」

一瞬にして、友成の心拍数はアイドリング状態まで落ち着いた。

今の友成の表情は、豆鉄砲を喰らったハトの様に、キョトンとした

まま固まっている。

「よかったー。友成くんって、不良だけど人が良さそうだったから。友成くんにお願いして、正解だったなー」

由香の表情は、パアッと明るい色に染まった。

（何か嬉しいけど……勘違いして舞い上がった自分がダサい……）

友成は、正直複雑な心境だった。勘違いしてたとは言え、相談を受けることになってしまった。既に戻れない状況だと理解するのは、時間はかからなかった。

「……ふう。で、相談って何の相談？」

一旦火が付きっぱなしのタバコの煙を吸ったのち、本題に入った。

「うん、私のお姉ちゃん。一年D組の、須藤美香スドウミカって言うんだけど」

「一年でお姉ちゃん？ 同学年って事は、双子なのか？」

「ううん。私が三月生まれで、お姉ちゃんは四月生まれなの。学年は一緒だけど、双子じゃないんだ」

「……そりやまた、珍しい話だな」

「うん、そうなの。それでね……」

由香の話を要約すると、こういうものだった。

由香と同学年の姉、須藤美香は不良少女。そのせいか、学校もサボりがちで深夜帰宅も多い。最近では、帰宅しない日も増えている。心配になっている由香は、家に帰ってきて欲しいし、一緒に学校に行きたいと願っている。

しかし、自分が深夜に出歩くことは親が許さないし、どこに居るのかも検討が付かない。そう言う訳で、同じクラスの友成に相談を持ちかけた。何故友成なのかと言うのは、彩を通じて何度か話をしていると言うのが大きな割合を占めていた。

実際、面識の無い不良生徒に突然相談に乗って欲しいと言っても、まず効果は無いだろう。第一に、話しかけることさえも億劫になる事は必然だ。

話を一通り聞いた友成は、由香を見て一言こう言った。

「……まあ、乗りかかった船は途中じゃ降りれねえしな。タバコの

口止め料ってことで、引き受るかな」

友成は、由香に向けて左目をパチリとウインクした。

「うん、ありがとうね。友成くん!!」

由香は明るい笑顔を見せて、友成の右手を両手をギュッと握り締めた。

（これはこれで、得したって事かな）

内心は、頼られて嬉しい友成だった。

その日の午後八時過ぎ。駅前の商店街近くの、小さな公園。私服姿でたむろって居る三人。友成に呼び出された春樹と雄太は、芝生の地べたに座りながら放課後に起きた、一連の事を聞いていた。

「ギャツハツハ!!　そいつは、マジ傑作だな!!」

話の概要を聞いた春樹は、腹を抱えて大笑いしていた。

「……ウッセーよ。お前らだって、絶対同じ事になるっての!!」

友成はそう言って、口を尖らせる。

「いや、スマン。でも……ププツ!!」

雄太も、堪え切れずに笑いが出てしまう。

「……クソ、お前ら。人事と思いやがって」

友成は不機嫌そうに、缶コーヒを飲み干した。

「所でよ、友成。その、須藤って娘の姉ちゃんの顔とか解るのか？」

一頻り笑い終えた春樹が、友成に聞いた。

「まあな。由香ちゃんのメアド聞いて、写真送って貰ったよ」

友成は、得意げに携帯電話の画像フォルダを開いた。

「お前、ちゃっかりしてるな……」

雄太は呆れつつも、感心していた。

「んで、検討は付くのかよ？」

春樹は、タバコを取り出しながら聞いた。

「さあな。この街に居るなら、ある程度は絞れるけどな。遊ぶところなんか、少なーしよ」

友成は、携帯電話をポケットにしまった。

「つまり、他所の街に居るなら解らないというわけだな」

雄太は、スクリと立ち上がった。

「まあ、そうなるわな」

友成も、それに習って立ち上がる。

「んなら、駅前をブラブラしてみっか」

春樹も立ち上がって、取り出した一本のタバコを安物のライターで着火した。三人は、ロールプレイングゲームのパーティーを組んだような気分で、駅前の通りへと向かうのだった。

三人が駅前やメインストリートをフラリと歩くこと、十数分。翌日が祝日の影響か、平日よりも幾分人が多い。

「結構出歩いてる奴ら、多いんだな」

友成は、交差点をグルリと見渡しながら言った。

「しかもカップルばっか。俺等だけだぜ、男三人なんざ……」

春樹は、嘆くように呟いた。

「ま、そう言うなって。せめて、可愛い娘と知り合えるフラグが立ってるだけマシだって」

雄太がなだめる様に言った。

歩行者の信号が青に変わって、反対の歩行者通路へと移動していると、春樹の視界にある女性の姿が捉えられた。

「なあ。あそこの角に立ってる娘って、探してる娘じゃねえのか？」

春樹は、女性の姿が見える方を指差した。

「……暗くて解らないけど。それっぽいと言えば、確かにそうだな」
雄太も、その女性の姿を確認した。

「俺には見えねーんだけど……」

三人の中で、ダントツに背が低い友成は、まだ姿を見つける事が出来ていなかった。さっさと交差点を渡りきって、女性の姿を見つけた方へと向かう。

その女性は、ビルの壁にもたれかかって、腕を組んでうつむいた状態で動く気配が無い。少々暗いが、少女の雰囲気を残したその表情には、不機嫌さが表れていた。

由香と良く似た顔立ちだが、由香よりも幾分凛々しい印象を持つ。茶色に染めたロングヘアを、ポニーテールにまとめた姿は、十人中九人は綺麗と言っただろうルックス。腕まくりをしたスカジャンとジーンズ姿の上からでも、スレンダーとわかるスタイル。

間違いなく探していた人物、須藤美香だった。

「……ちよつと、その機嫌が悪いのが良くわかるお姉さん？」

まずは、春樹が少女に声をかけた。少女は、三人組の男子を見て、不機嫌そうに強い言葉を返す。

「……生憎、ナンパならお断りだよ。そんなに尻軽じゃないから」

少女は、聞こえるほどの舌打ちをして、この場に一秒でも居たくないと言いたげな雰囲気を作っている。そのまま振り返って、三人とは逆方向に向かって歩き出そうとした。

「ま、そう言わないでよ。須藤美香さん？」

雄太がそう言うと、少女の足はピタリと止まった。

「……何で、アタシの名前知ってるわけ？」

美香は振り返り、三人を鋭く睨みつける。

「アンタの妹、須藤由香ちゃんから説得を頼まれてね」

友成は、美香の目を見ながらそう告げた。

「由香が説得？ バカにしてる訳？」

美香の表情は、先ほどよりも三割りは不機嫌の度合いが増していた。

「そーゆうつもりはねーよ。頼まれたのはホント」

友成は、淡々と告げる。

「フン。ホントの話でも、アタシは帰りたくもないし、学校も行きたくないんだから。説得なんか意味無いからね」

美香の強気的態度に、三人はそれぞれ思うことが有った。

（……こりゃ、何言っても聞かねーっぱいな。メンドーだわ）

友成は内心で、正直面倒事を引き受けたと思ってしまった。

（顔は良いけど、口は悪いし気が強え……。じゃじゃ馬もいいとこだぜ）

春樹は、ヤレヤレと言いたげな表情で、ため息を吐いた。

（絵に描いたようなツンデレ。姉妹揃って萌え要素バツチリ）

雄太だけは、無意味にプラス思考だったりする。恐らく、彼の視線には一枚だけフィルターが貼られているに違いない。

「ハイ、話はオシマイだよ。さつさと、帰りな」

打ち切るように美香が言い放ち、再度振り返って歩き始めた。

しかし、二歩進んだ時点で、別方向から声が飛んできた。

「そっちの話が終ったんなら、こっちの話に移ろうじゃねえか」

美香の前方メートルに二人組の男が、道を塞ぐ様に立っていた。そこそこに体格も良く、如何にも不良の好みそうなダボダボの格好をしている。

「あんた等、また殴りたい訳？」

美香は、二人組の男を睨みつけて、啖呵を切った。会話の内容からすると、以前に一悶着有ったと、推測できる。

「おっと、今回は油断しねえようにしねえとな。この姉ちゃん、なかなかやるからよ。最近の女って、ツエーからね、ケツケツケ」

二人組みの片割れが、見下した様な笑いを見せて、美香と友成達三人を見る。すると、後ろに別の四人の男が現れていた。人数を集めて、潰そうと考えているのは明白だ。

「デメエら、マジか……」

美香はギリッと、奥歯をかみ締めた。

「ヘッヘッへ。ついでにこっちの野郎共も、やっちまうかあ」

四人組の男達の一人が、下品な嘲笑をしながら言った。その様子を見て、友成はふうと溜め息を吐き出した。

「まったく……。結局、こういう展開になるわけね」

友成は面倒なのか、肩をすくめながらぼやいた。

「イイんじゃないの。最近、暴れてなかったしよ」

春樹は、ニヤツと笑って指をポキポキと鳴らした。

「それなら、俺は二人に任せるとするさ」

雄太はそう言ったすぐ後に、右手で美香の肩を抑えた。

「……なんだよ」

肩を叩かれた美香は、雄太を睨むように見た。

「ここは、ひとまずあの二人に任せといてよ」

雄太は、アイドルグループのファンサービス中のような、ハニカミスマイルを見せて、そう言った。

そして、次の瞬間には。

——バキヤァン——！！

春樹の右ストレートが、一人の不良を吹っ飛ばしていた。

「……なっ」

呆気にとられたのは、美香だけではなく、他の五人の不良達も同じであった。

「……テメエら、ボコボコにしたるわ——！！」

美香と雄太の前に居る不良が、逆上して殴りかかってきた。

「おっと、こつちだよ」

雄太は、右手を美香の腕に回して、二人揃ってバックステップ。

不良の拳は空を切った。

「……ちよっ、何！？」

美香は、腕を引っ張られたまま、訳がわからない状態だった。

「次、右に飛んで」

雄太は淡々と指示するように言った。二人揃って右に避けると、片割れの不良の蹴りが空砲に終わっていた。

「友成、任せた」

雄太が言くと、友成は既に隣に居た。

「しゃーねーな」

友成が短く言葉を切って、右のハイキックを顔面にブチ込んだ。

——ドゴォ——！！

顔面が持ち上る程の蹴りの直後に、追い討ちで左のフックをアゴに叩き込んだ。この二発で、一人目はなすすべなく、地面に沈んでいた。

「この、ドチビがあー!!」

不良の片割れが、叫びながら友成にパンチを繰り出した。しかし、友成は左手で難なく受け止めた。

「チビって言うんじゃねーよ!!」

チビと言われ、怒った友成は左手を薙ぎ払って、右のアップパーを放つ。

——ゴキヤアア——!!

本日の喧嘩で、一番鈍い打撃音を響かせると、不良は既に地面に大の字で転がっていた。

「はい、お終い」

友成はそう言いながら、ホコリを払うように手をパンパンとはたいた。

「春樹いー。そっちはどうよ？」

友成は後ろ側の春樹の様子を見ようと振り返る。それと同じように、雄太と美香も同じ方向に視線を移す。すると、春樹自慢の怪力で、既に三人が倒されていた。

「おう、後一人だ」

春樹の返答は、余剰シャクシャクと言った感じであった。

「て、テメエら……。俺ら、クニ商相手にこんだけムチャクチャやって……タダで済むと思ってるのか!!」

最後の一人が、悪あがきのように怒鳴り散らす。

(……クニ商って、ここら辺じゃ悪で有名な高校じゃない)

美香の脳裏には、クニ商と呼ばれる不良校の、悪い噂が一気に横切り、改めて三人の様子を見た。

しかし、雄太はハニカミスマイルを崩していない。友成は部外者の用に、別方向を向いてタバコに火を着けている。

「……だったら？」

そして、春樹は不適に笑ったまま、最後の一人に一步步近づいた。

「……ひっ!？」

春樹の不気味な笑いに、不良の顔は恐怖で強張っていた。そして、左で胸倉を掴んで強烈な右フックをぶちかました。

——バキィイツー!!

不良の顔面が、バウンドしたボールの様に弾かれる。

「バーカ。相手選んで喧嘩する位なら、不良なんかしてねえっつの」

そう言っただけで春樹が左手を離すと、不良は一撃で失神していたようで、糸の切れた操り人形の様に崩れ落ちてしまった。

「おっし」

友成は、春樹と雄太をチラリと見た。

「さてと……」

雄太も、春樹と友成へと、順番に視線を合わせた。

「……おう」

それを見て、春樹の首は縦に動いた。

三人の揃ったアイコンタクトは、次の行動の合図だったのだろう。

「……?」

ただ、美香にはその行動の意味が理解出来なかった。そして、三人が同時に美香を見つめて一言だけ、こう言った。

「警察来る前に、逃げるぜ!!」

四人は、一目散に走り出した。警察に通報が行くと、後々厄介だという事で、ここはさっさと逃げだしたのであった。

最初に集合していた公園に、戻ってきた友成達。久々の全力疾走で、全員肩で息をしている。

「あー、走ったら気持ち悪い……」

友成はそう言いながら、芝生の上に寝そべった。

「喧嘩よか、走る方がきついぜ」

春樹もそう言いながら、へたり込んだ。

「俺も運動不足だな……」

雄太も膝に手を添えて、呼吸を整えていた。

「……私だけ女なんだから、少しはペース考えてよ」

美香も深呼吸をしてから、芝生の上に腰を降ろした。そして、薄暗い電灯に照らされた男子三人をマジマジと見ながら、口を開いた。「そう言えばさ。アンタ達、多分涼浪だよね？ まだ、名前聞いてなかったんだけど？」

思い出したように、美香は聞いた。最初の内は聞く気は無かったのだが、予想外の強さを知ったので興味が出たと言うのが、本当の所だろう。

「そーいや、まだ自己紹介してねーな」

友成はゆつくりと上体を起こしてから、言葉を続けた。

「俺は、早瀬友成。宜しく頼むぜ」

友成はそう言って、右手をクイツと挙げた。

「俺は手塚春樹ってんだ」

春樹は美香を見ながら、そう告げる。

（こっちは“東中の狂犬”で、あっちが“西中の大魔神”か……。涼浪に居るのは噂で聞いてたけど。……道理で強い訳ね）

美香は二人の強さに、即座に納得した。何より、同学年の悪名高い不良の二人がつるんでいる事自体が、予想外としか単語が見つからない。

「俺は、相原雄太。一応言っておくけど、俺はこの二人と違って不良じゃないよ」

雄太も、スマイルを浮かべてそう言った。

（コイツは聞いたこと無いな。でも、つるんでるくらいだし、喧嘩も慣れてるっぽいから……。案外やれる奴かも知れないね）

雄太に視線を写しながら、美香は内心でそんなことを考えていた。「俺も、不良じゃねーぞ」

友成がそんな風に横槍を入れる。

「嘘付け!!」

春樹が、すかさず突っ込んだ。

「お前が不良じゃないなら、日本全国の不良が優等生になるな」

雄太も、茶化しながら口を出す。

「オイオイ、一秒足らずで否定するなよ」

友成は、唇を尖らせながら言った。

「……プツ……クク。アッハッハ……アンタらバツカじゃないの」

美香はそのやり取りを見て、思わず腹の底から笑い出していた。

「お前まで、笑いすぎだつての……！」

友成は美香を指差して、文句をたれる。

「アンタ達が、面白いつて思ってた……。あー……何か、久しぶりに笑った気がする……」

美香はポツリと、呟いた。

「そー思っんならよ、ちゃんと学校来いよ。……美香」

友成は、微笑しながら美香を見つめた。

「ああ。アンタ達となら、退屈しそうに無いからね」

美香は、由香や彩に見劣りしない、百万ワットの笑顔を見せながら、嬉しそうに言った。

（……こう見ると、結構可愛いじゃねーの）

友成は思わず、ドキツとした。

（こう言う風に笑っんだな、この娘）

春樹も、心拍数が二割増し上昇したのを感じた。

（これは、見事なツンデレ……）

雄太は口から出そうになった言葉を、堪えながら飲み込んだ。恐らく、口に出したら殴られると考えた結果なのだろう。

そして、翌々日。

昼休みに入り、友成は再び由香と二人で屋上に居た。

「本当に、ありがとうね」

由香に、深々と頭を下げられて、友成は若干恐縮するような気持ちになっていた。

「ま、良いつて事よ。どうせ、暇だったし」

謙遜する様に言うが、友成の頬は少しだけ赤くなっていた。

「それでね、お礼に何だけど……」

由香は、少しだけ照れながら言った。

「……ん？」

その様子を見て、極力冷静を装う友成だったが、内心では色々な期待に胸を膨らせた。

（もしかして……キス位はさせてくれるとか？）

かなり、自分の都合の良いように考えている。そして、由香は鞆から、可愛らしくラッピングされた、袋を取り出した。

「昨日、クッキー作ってみたの。良かったら食べてね」

由香はそう言って、百万ワットのスマイルで手作りのクッキーを手渡した。

「サンキュー。美味しくいただくわ」

友成も期待とは違っていたが、笑顔でそう答えたのだった。

「うん。それじゃ、また教室でね」

由香は、笑顔で手を振ると、先に教室に戻っていった。一人屋上に残った友成は、クッキーを一枚ポリポリと頬張った。

（うん……味は良いけど……何かすげー固いな……）

由香の手作りクッキーは、結構固かったようだ。奥歯でバリバリと噛み砕いて、缶コーヒーストで喉の奥に流し込む。

そして、ポケットから取り出したタバコをくわえると、一連の流れで火を点ける。

（……まあ、これにて一件落着いて事かな）

そう思いながら、屋上で五月晴れの空を見上げつつ、タバコの煙を吐き出した。

しかし、今回の一件で起こった喧嘩が、また大事に発展していく。そのことを、友成達はまだ知る由も無かった。
？

四話 委員長の頼み事（後書き）

今後は、この六人がメインキャラになっていきます。

詳しい紹介は、後々紹介していきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9580x/>

Wild Angel

2011年11月12日03時22分発行